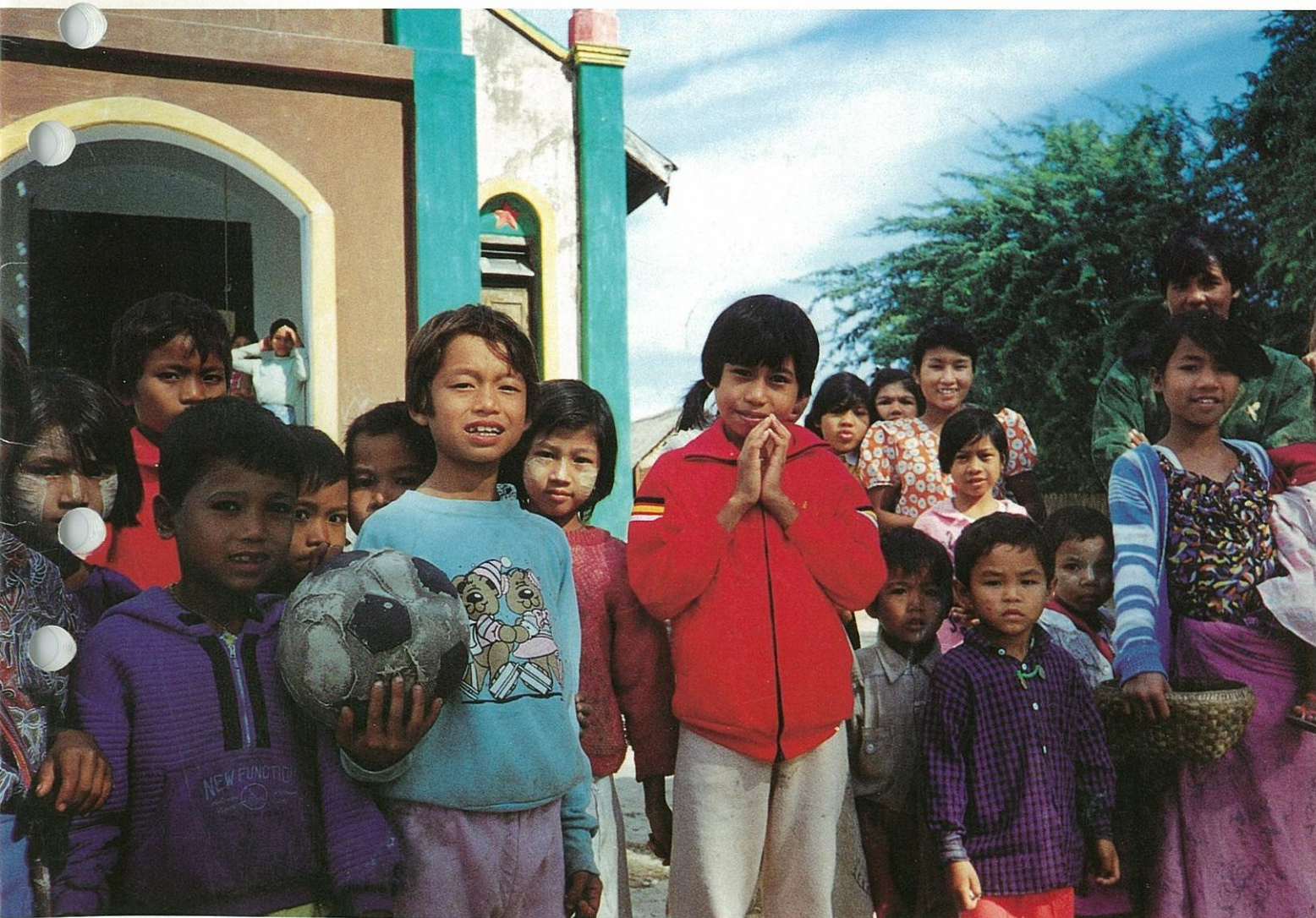


アジア・アフリカ言語文化研究所

東京外国語大学

要覧 1995



目 次

概 要

歴史と性格……………1
組織……………3
研究部門構成……………4
職員……………6
運営委員・専門委員……………8

研究活動

共同研究プロジェクト……………9
国際学術交流……………21
長期研究者派遣……………24
短期共同研究員(公募)・大学院・研究生…25
言語文化情報の統合化……………26
言語研修……………27

施 設

電算機室……………28
図書室……………29
音声学実験室……………30
出版物一覧……………31

表紙写真説明

ビルマの王朝時代に活躍したポルトガル人傭兵たちのかわいい末裔。上ビルマの町シュエボウの北はずれに、マハー・ナンダー湖という灌漑用の湖がある。その少し奥にメイゲン村と呼ばれる小さなカトリックの集落があり、そこに住む人々は18世紀末頃まで仕えたポルトガル人傭兵たちの末裔として知られている。もはや血が混ざって一般のビルマ人とあまり変わらない顔立ちをしているが、よく見ると髪の毛が赤がかっている子もいるし、目の黒さが一般のビルマ人よりずっと薄い(茶色に近い)子も見かける。無邪気で愛想の良い子供達ばかりだが、サッカーボールを持つ少年の後でこちらをみつめる少女だけは、その視線がなぜか神秘的に輝き、何かを私に訴えかけているかのようであった。この少女にとって、遠い日本から来た私はどのように映ったのだろう。

(根本 敬 1994年12月27日撮影)

INSTITUTE FOR THE STUDY OF LANGUAGES
AND CULTURES OF ASIA AND AFRICA
TOKYO UNIVERSITY OF FOREIGN STUDIES

4, NISHIGAHARA, KITAKU, TOKYO 114
TEL. 03-3910-9147
FAX. 03-5974-3838

Cable Address: GENGOBUNKA TOKYO

概 要

歴 史 と 性 格

アジア・アフリカ言語文化研究所は、人文科学・社会科学系では、わが国ではじめての共同利用研究所です。共同利用研究所の使命とは、全国の研究機関に所属する専門の研究者のために設備や資料を提供し、研究交流の機会をつくり、それによって研究の進展を促すことです。

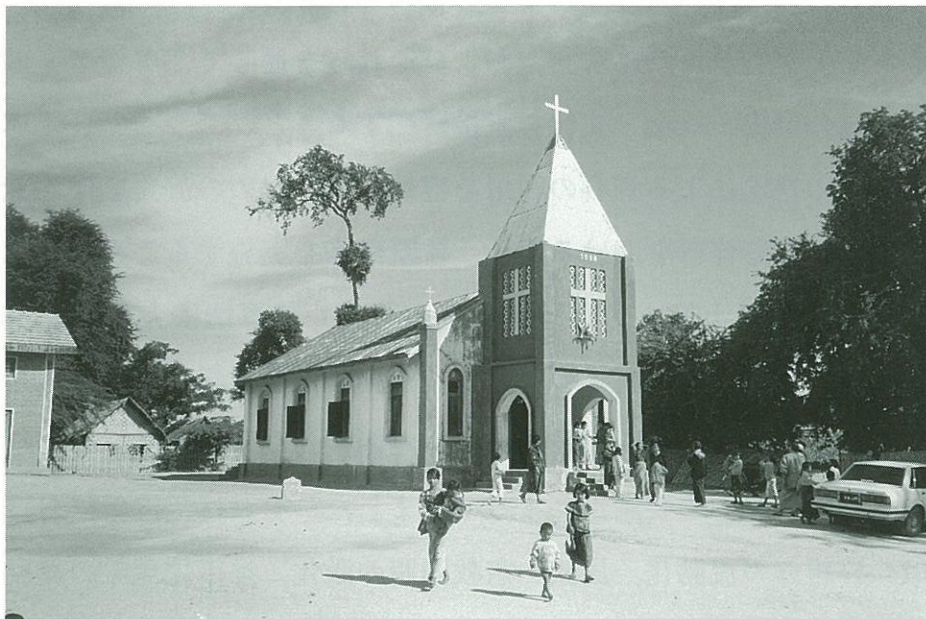
戦後の復興が進むとともに、日本の運命がアジア・アフリカ諸国と深くかかわりあっていることが認識されはじめました。このような背景のもとに、1961(昭和36)年に日本学術会議がアジア・アフリカ言語文化研究所を設置するよう勧告しました。その後、各方面の理解と協力を得て、1964(昭和39)年4月1日、本研究所は東京外国語大学附置の共同利用研究所として発足しました。本研究所の設置目的は、次のようにまとめられています。

- 1) アジア・アフリカの諸言語、およびそれらを通じて、アジア・アフリカ諸地域の歴史・社会・文化を直接研究すること。
- 2) それらの言語による資料の利用を容易にするための辞典を作ること。
- 3) それらの言語修得を助けるため、言語研修を実施すること。

以後、四半世紀以上経て、本研究所をとりまく諸事情は大きく変わりました。学界では、人文・社会科学の分野で、言語学・歴史学・人類学などのような、すでに確立している学問体系に依存した個別的な研究分野をのり越えた新しい学問・理論構築への要請が高まってきました。それは、近年における国際化、地域の枠組みの流動化、民族・宗教問題の激化、都市化現象の進展などの急激な世界情勢の変化、および、狭い地域的枠組みにとらわれないより広域な視野からの研究の必要性に対する認識の深まりなどに関連しています。他方、最近における情報処理技術の発達の中かで、文字のみならず音声や画像の処理が可能になり、さらに、これらを個別の情報としてではなく一つの情報ネットワークに統合化する研究が急速に進展してきています。

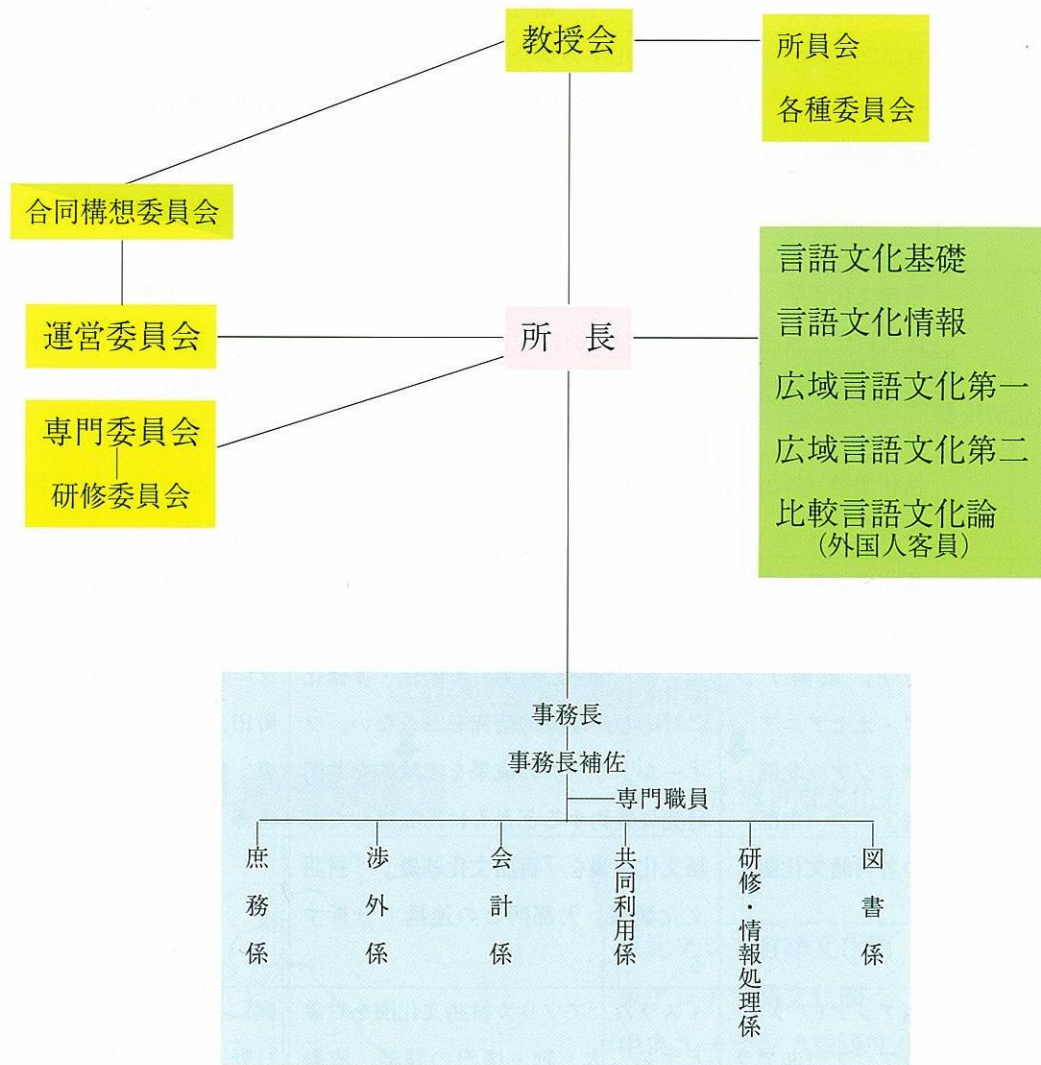
以上のような学問的・社会的要請，アジア・アフリカ地域の社会情勢の変化，科学技術の発達に対応して本研究所は研究部門を増設してきましたが，1991(平成3)年度には，研究体制の抜本の見直しをおこない，言語を媒介として成立している文化を総合的に研究する学問である「言語文化学」理論の構築，広域的なフィールドワークや共同研究の実施，情報の統合化処理のための理論と方法の開発などをめざして，従来の16小部門・1客員部門(外国人)を，4大研究部門・1客員部門(外国人)に再編成しました。さらに，東京外国語大学に1992年度に新たに設置された大学院地域文化研究科博士後期課程を全面的にバックアップするために，多くの教官が参加し，教育活動にも力を注ぎ始めています。

わが国における言語文化研究の発展に貢献し，流動する世界情勢にすみやかに対応しつつ，わが国とアジア・アフリカ諸国との学術文化交流に積極的に寄与することが，本研究所の責務であり，所員一同の願いでもあります。



「表紙の写真」で説明したビルマ・シュエボウのそばにあるメイグン村の教会。ここの村人はポルトガル人傭兵の末裔で，ほとんどがカトリック。この異国情緒たっぷりのかわいらしい教会堂には，ビルマ人神父が毎日曜日シュエボウから通ってくる。(根本 敬)

組 織



(1995年4月1日現在)

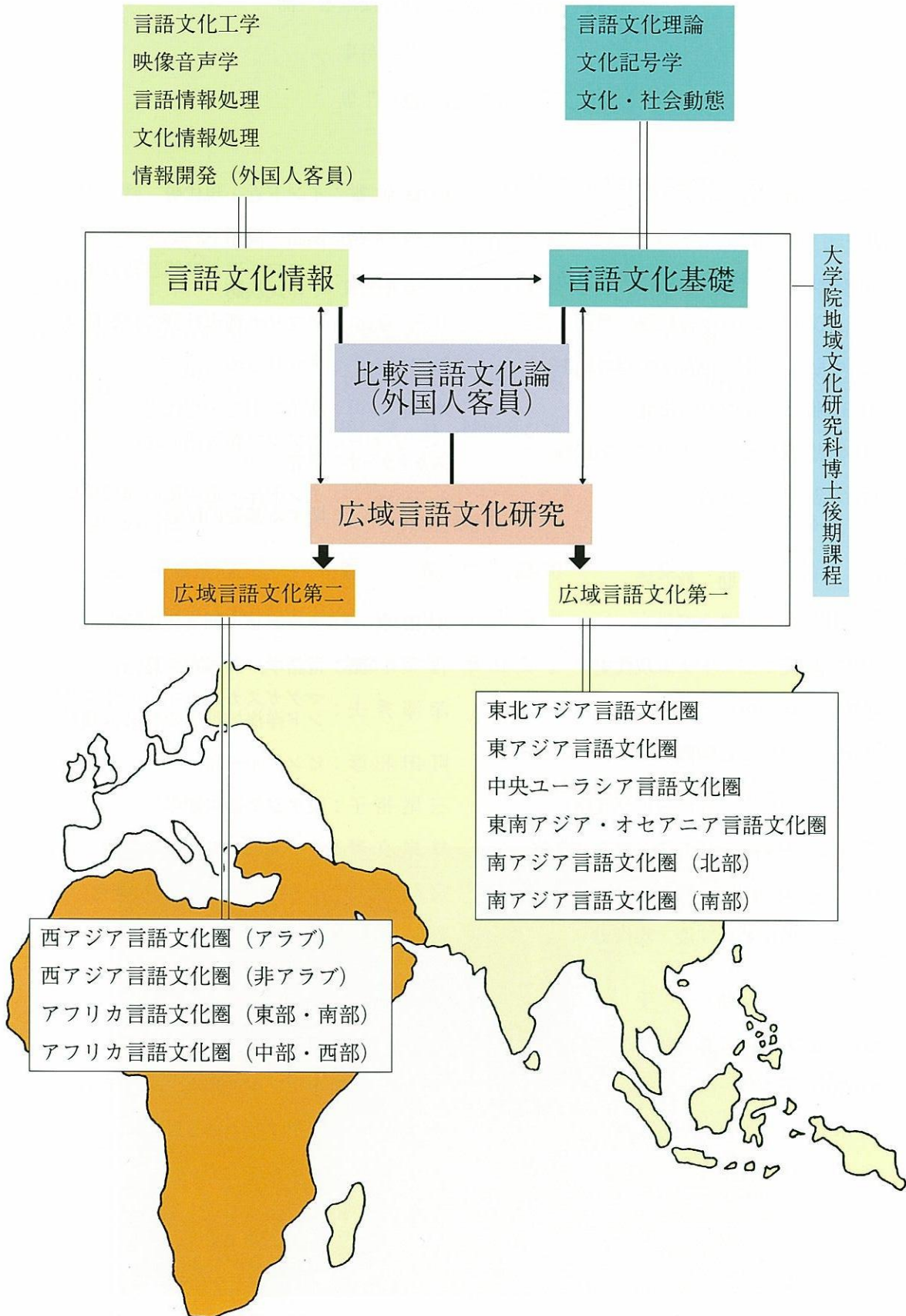
区分	教授	助教授	講師	助手	その他の職員	計
定員	(4) 17	17	0	8	27	(4) 69

()は外国人客員数を外数で示す

研究部門構成

部門名	研究分野	研究内容	所属研究者
言語文化基礎	言語文化理論, 文化記号学, 文化・社会動態	言語文化学の構築を図るためにアジア・アフリカの言語文化を比較・分析し, 歴史学, 文化人類学, 言語学など関連諸研究分野の成果を統合して理論化する。	川田, 松下, 家島 新免, 根本, 峰岸 田辺
言語文化情報	言語文化工学, 映像音声学, 言語情報処理, 文化情報処理, 情報開発 (外国人客員)	アジア・アフリカの言語文化情報の分析・処理と新しい情報処理システムの構築, 及び情報処理した言語文化情報の提供, 共同利用・公開のための手法を開発する。	加賀谷, 坂本 中嶋, バースカララーオ 小田, 栗原, 高島 深澤, 高知尾, 真島 B. B. Rajapurohit (外国人研究員)
広域言語文化 第一	東北アジア, 東アジア, 中央ユーラシア, 東南アジア・オセアニア, 南アジア (北部), 南アジア (南部) の各言語文化圏	東は沿海州より西はフィンランドあるいはインド亜大陸までを対象とする。人・物・情報の移動, 流動化・多様化に対応し, 学際的研究をおこない, フィールドワークの成果を広域的な共同研究に集約するとともに, 収集した言語文化情報を「言語文化基礎」・「言語文化情報」大部門との連携で分析する。	池端, 石井, 新谷 内藤, 水島 ダニエルス, 中見 町田, 三尾, 宮崎 森, 菊澤, 西井 吉澤
広域言語文化 第二	西アジア (アラブ), 西アジア (非アラブ), アフリカ (東部・南部), アフリカ (西部・中部) の各言語文化圏	イスラム, アフリカ言語文化圏を対象とする。人・物・情報の移動, 流動化・多様化に対応し, 学際的研究をおこない, フィールドワークの成果を広域的共同研究に集約するとともに, 収集した言語文化情報を「言語文化基礎」・「言語文化情報」大部門との連携で分析する。	梶, 上岡, 中野 日野, 西尾, 羽田, 林 飯塚, 黒木
比較言語文化論 (外国人客員)		言語文化学の確立を図るために, 外国人研究者 (特にアジア・アフリカ諸国) を客員教授として招へいし, 共同研究を推進する。	Narayanan M. G. S Chob Kacha-Ananda Daniel J. Mkude Ram Adhar Singh

動的なアジア・アフリカ言語文化学の構築をめざす研究部門構成図



職 員

所長 (併任) 教授 池 端 雪 浦

研 究 部

教 授

- | | |
|-------------------------|-------------------------------|
| 池 端 雪 浦：フィリピン史における政治と宗教 | 内 藤 雅 雄：インド近・現代史 |
| 石 井 溥：南アジアの人類学 | 中 嶋 幹 起：漢語・満州トゥングース語 |
| 加賀谷良平：音響音声学，アフリカ諸言語 | 中 野 暁 雄：アフロ・アジア諸言語およびその民族誌 |
| 梶 茂 樹：バンツー諸語，言語人類学 | 日 野 舜 也：アフリカ都市社会の比較研究 |
| 上 岡 弘 二：イラン諸語，イスラムの民間信仰 | 松 下 周 二：アフリカの言語 |
| 川 田 順 造：アフリカ文化 | 水 島 司：南インド近・現代史 |
| 坂 本 恭 章：オーストロアジア諸語 | ペーリ・バー：南アジア諸言語の比較・対象スカララーオ研究 |
| 新 谷 忠 彦：言語哲学 | 家 島 彦 一：インド洋・地中海の海域史に関する基礎的研究 |

助 教 授

- | | |
|--|------------------------------------|
| 小 田 淳 一：計量文献学 | 羽 田 亨 一：サファビー朝文化史研究 |
| 栗 原 浩 英：ヴェトナム現代史 | 林 徹：言語学，チュルク諸語 |
| 新 免 康：中央アジア近・現代史 | 深 澤 秀 夫：マダガスカルを中心とするインド洋海域世界の社会人類学 |
| 高 島 淳：言語情報処理とヒンドウー教
クリスチャン・16～20世紀中国史における社
ダニエルス・会，経済および技術 | 町 田 和 彦：ヒンディー語 |
| 西 尾 哲 夫：アラビア語・アラブ文化 | 三 尾 裕 子：東アジアの人類学 |
| 中 見 立 夫：内陸・東アジアの国際関係史 | 峰 岸 真 琴：オーストロアジア諸言語 |
| 根 本 敬：ビルマ近・現代史 | 宮 崎 恒 二：オーストロネシア諸社会の研究 |
| | 森 幹 男：インドシナ比較文化史 |

助 手

- | | |
|---------------------|----------------------|
| 飯 塚 正 人：イスラム学 | 田 辺 明 生：南アジアの文化と社会 |
| 菊 澤 律 子：オーストロネシア諸言語 | 西 井 涼 子：東南アジアのエスニシティ |
| 黒 木 英 充：東アラブ近・現代史 | 真 島 一 郎：西アフリカの人類学 |
| 高 知 尾 仁：世界表象と象徴性 | 吉 澤 誠 一 郎：中国近現代史 |

事 務 部

事 務 長 安 田 隆

事務長補佐 堂 前 保

専 門 職 員 浅 見 義 則

庶 務 係

係 長 松 本 省 三

文 部 事 務 官 小 林 浩

文 部 事 務 官 福 田 華 恵

文 部 技 官
(自動車運転手) 伊 藤 功 一

会 計 係

係 長 田 中 鉄 哉

文 部 事 務 官 大 島 俊 宏

文 部 事 務 官 藤 野 和 弘

文 部 事 務 官 川 崎 勝

用 務 員 植 田 カ ツ エ

研 修 ・ 情 報 処 理 係

係 長 石 橋 徳 三 郎

主 任 官 今 井 健 二
文 部 技 官

文 部 事 務 官 中 嶋 弘 子

文 部 事 務 官 小 笠 原 信 博

渉 外 係

係 長 阿 部 吉 宏

主 任 谷 川 か つ 子

文 部 事 務 官 吉 野 晴 美

共 同 利 用 係

係 長 仲 勝 司

主 任 金 井 京 子

文 部 事 務 官 津 田 貞 子

図 書 係

係 長 佐 藤 剛

主 任 中 川 陽 子

主 任 須 郷 知 子

主 任 西 浦 数 雄

文 部 事 務 官 近 藤 晴 彦



新疆・ベシュケリム郷の農民。葡萄だなのある典型的なウイグル農家の中庭にて。(新免 康)

運 営 委 員

研究所の日常の業務の運営は、教授・助教授で組織する教授会においておこなわれますが、共同利用研究所としての本来の機能を適切に遂行するため、これとは別に運営委員会が置かれ、研究所の運営の基本方針などの重要な事項について、所長の諮問に応えます。運営委員には研究所の教授・助教授、および所外の学識経験者など、25名以内が委嘱されます。第16期(1995.2~1997.1)の運営委員は現在以下の通りです。

池 端 雪 浦	所 員	田 中 二 郎	京都大学教授
石 井 溥	所 員	田 中 敏 雄	東京外国語大学教授
石 井 米 雄	上智大学教授 (京都大学名誉教授)	谷 泰	京都大学教授
石 毛 直 道	国立民族学博物館教授	土 田 滋	順益台湾原住民博物 館長
伊 谷 純一郎	神戸学院大学教授 (京都大学名誉教授)	中 野 暁 雄	所 員
梅 田 博 之	麗澤大学教授 (東京外国語大学名誉教授)	西 田 龍 雄	京都大学名誉教授
應 地 利 明	京都大学教授	間 野 英 二	京都大学教授
大河内 康 憲	大阪外国語大学教授	宮 岡 伯 人	京都大学教授
久 馬 一 剛	京都大学名誉教授	宮 本 正 興	大阪外国語大学教授
古 賀 正 則	明治大学教授	矢内原 勝	作新学院大学教授 (慶應義塾大学名誉教授)
輿 水 優	東京外国語大学教授	山 崎 利 男	中央大学教授 (東京大学名誉教授)
斯 波 義 信	国際基督教大学教授		
末 成 道 男	東京大学教授		
祖父江 孝 男	放送大学教授 (国立民族学博物館名誉教授)		

専 門 委 員

所長の諮問に応じて、研究所の共同研究に関する専門的事項を審議する専門委員会があり、委員は所外の学識経験者のうちから委嘱されます。1995年度の委員は以下の通りです。

研修委員会

梅田博之、大江孝男(東京外国語大学名誉教授)、大河内康憲、大東百合子(明海大学学長)、小澤重男(東京外国語大学名誉教授)、輿水優、柴田紀男(天理大学教授)、土田滋、富盛伸夫(東京外国語大学教授)、西田龍雄、宮本正興

研 究 活 動

共同研究プロジェクト

共同利用研究所である本研究所にとって、所員が中心となって所外の研究者と共同で推進する共同研究プロジェクトは、最も大切な研究業務のひとつです。これまで数多くのプロジェクトが組織され、多様な研究成果をあげてきました。

本年度のプロジェクト名と各プロジェクトの研究代表者・共同研究員は次のとおりです。

言語文化基礎部門

多民族国家における異化・同化形態の比較研究（宮崎恒二）

（所員 3 名，共同研究員 13 名）

社会や文化が静的な存在ではなく、他者との接触を経て現在に至っていたのだと認識しますと、文化・社会の動的把握は派生的な応用課題ではなく、一般理論を提供する基礎的分野として位置づけられることとなります。本プロジェクトの目的は、そのような動的的研究における一つの試みとして、多民族国家における異化と同化の形態を明らかにすることにあります。

各々異なる専門領域に属する研究者を組織し、特定地域を集中的に研究することにより、異質な諸文化の接触によってもたらさせる各文化自体の変容形態と接触の結果、新たに生成されてくる文化形態に着目し、各文化の特性のみならず、異化及び同化の諸過程を明らかにします。そしてそれらの作業を通じて、異文化接触の一般理論を見出し、社会・文化動態研究に貢献したいと考えます。

穴沢 真	板垣明美	上杉富之	加藤 剛	金子芳樹
黒田景子	桑原季雄	菱口善美	佐藤哲夫	佐藤宏文
富沢寿勇	中澤政樹	野村 亨		

チングルプットの総合的研究（水島 司）（所員 3 名，共同研究員 5 名）

本プロジェクトは、南インドのチングルプット地域を対象に、紀元前から今日に至る時代を多角的に研究するものです。チングルプットは、海外交易や植民地経営の拠点であったマドラスや、大宗教センターであるカーンチープラム等、南インドの歴史的展開の中で極めて重要な位置を占めてきた都市を含む地域です。同地域に関しては、古代・中世に関する建築物や碑文が残されているだけでなく、17世紀以降のイギリスのインド進出にともなって、極めて多くの資料が残されています。そして、それらに関して歴史

学、宗教学、文化人類学、経済学、文学をそれぞれ専門とする南インドの専門家が、従来個別的に研究を進めてきており、共同研究の基礎が出来上がりつつあります。本プロジェクトでは、これらの研究者が協力し、チングルプットという極めて限定された空間を対象にして、古代から現代にいたる歴史的变化を総合的に解明することを目的としています。

研究期間はさしあたり4年とし、はじめの2年間は国内で討議を重ね、3年目からは現地調査を予定しています。

栗屋利江 辛島 昇 重松伸司 高橋孝信 柳沢 悠

音・図像・身体による表象の通文化的研究（川田順造）（所員5名，共同研究員23名）

この学際的共同研究では、音（音声言語を含む）、図像（文字を含む）、身体による表象を、相互に関連させてとりあげ、通文化的な視野で検討します。これらの総合されたものとしての映画・演劇も対象とします。異質な媒体による表象をあえて関連させ、対比することによって、それぞれのうちに、あるいは全体の中に、隠れていた特質や問題を発見してゆきます。

第1，2年度目は、基本的な問題の設定、音・図像・身体それぞれを媒体とする表象の事例研究を通して問題の検討を行いました。第3年度目は、より抽象度を高め、異なる媒体の表象を関連・対比させてとりあげ、「表象」という概念についても学際的な視野で再考します。

市川光雄	應地利明	大森康宏	加藤千代	吉川周平
小松和彦	佐藤深雪	卜部隆嗣	菅原和孝	塚田健一
鶴田真弓	出口 顕	友枝啓泰	野村雅一	坂東八十助
藤田隆則	堀内 勝	森山 工	山口 修	山下洋輔
山本順人	吉田憲司	渡辺公三		

アジア・アフリカ諸言語の総合研究（加賀谷良平）（所員11名，共同研究員59名）

このプロジェクトはアジア・アフリカ諸言語研究の最も基礎的な総合プロジェクトです。その主たる目的は、フィールドワークによって得た資料を、諸研究者による多角的分析・資料統合（同系統言語間での比較・異系統言語間での対照）を通じて、主として欧米の言語を基にして構築されてきた言語理論をアジア・アフリカの諸言語から見直し新たな言語理論を構築することにあります。またそれらの膨大な言語資料を、コンピューターを始めとする様々な情報機器を用いて分類・分析する方法の開発もその目的とします。

このプロジェクトは、文法部会と音韻部会の2部会から構成されています。各部会毎に、その研究の基礎となるフィールドワーク等によって得られたアジア・アフリカ諸言語の資料分析や比較、またその構造の解明、さらにその情報化のための会合を開き、研

究発表と討議を行います。

石山伸朗	伊豆山敦子	岩田 札	内田紀彦	上野善道
大江孝男	大島 稔	小田真弘	岸田泰浩	木下宗篤
金 東俊	切替英雄	久保智之	窪園晴夫	熊本 裕
近藤達夫	坂本比奈子	崎山 理	柴田紀男	柴谷方良
清水克正	杉田 洋	杉藤美代子	副島昭夫	高橋慶治
田口善久	田窪行則	田村すず子	壇辻正剛	月田尚美
土田 滋	角田太作	富田健次	中井幸比古	中川 裕
中島 久	奈良 毅	縄田鉄男	新田哲夫	橋本 勝
早田輝洋	原 誠	稗田 乃	福井 玲	福田権一
福原信義	益子幸江	松村一登	水野正規	溝上富夫
箕浦信勝	宮岡伯人	村崎恭子	森口恒一	守野庸雄
藪 司郎	山田幸宏	湯川恭敏	吉川 守	

シャン文化圏に関する総合的研究 (新谷忠彦) (所員 3 名, 共同研究員 2 名)

本プロジェクトの目的は、(1) 一つの複合文化交流圏 (シャン文化圏) の解明のための方法論の検討。(2) シャン文化圏における情報収集と現地調査のための準備。(3) 現地調査の報告と検討。(4) 文献資料及び非文献資料の解題・整理。(5) 基本的文献資料の解説出版である。以上の目的のため、年に 3 回研究会を開き、その成果を資料集、論文集として出版する。

石井米雄 横山廣子

言語文化情報部門

言語研修 (中嶋幹起) (所員 19 名, 共同研究員 7 名)

言語研修委員会は、その分野に精通する研究者によって構成され、アジア・アフリカの言語に習熟し、实际的に役立つ能力を高める最も効果的な方法を検討することを目指しています。

短期集中言語研修の目標は、

- 1) 口語及び書き言葉の能力をつける。
- 2) 言語の科学的研究と実際の応用の訓練の提供。
- 3) 大学院相当の学生に野外調査を実施するための手段としての言語習得の援助。

専門委員会が年 2 回、専門委員・共同研究員合同会議が年 1 回開催され、研修言語の選定、教授法、開催時期・期間、実施方法、評価等について討論します。

大坪一夫 佐々木猛 柘植洋一 長野泰彦 星実千代
森安孝夫 吉川武時

辞典編纂プロジェクト（小田淳一）（所員 8 名，共同研究員18名）

アジア・アフリカ諸言語の言語資料を収集して計算機処理を行い，それに音韻論的，形態論的，統辞論的分析を施して，これらの言語の辞典編纂に備えると共に，処理過程で得られた機械可読形式の索引を作成します。

鶴殿倫次	遠藤由里子	太田 斎	大塚秀明	大橋由美
落合守和	小野 基	北村 甫	慶谷壽信	佐々木猛
佐藤 進	武内紹人	富平美波	豊島正之	中村雅之
花登正宏	平田昌司	宮脇淳子		

アジア・アフリカ言語文化資料の情報処理（上岡弘二）（所員 8 名，共同研究員21名）

本プロジェクトは，アジア・アフリカ諸地域における言語文化資料（テキスト，音声，画像，映像などを含む）の機械可読形式（machine readable form）化とその利用研究を目的とする。

対象となる言語文化資料には，既存の異なるメディアの形で保存されている資料（手書き，印刷物，各種テープ，フロッピーなど）ばかりでなく，新たに目的別に構築すべき資料（各言語の機械可読辞書など）も含まれる。

またこれらの資料を有機的に利用できる統合環境も研究課題としている。

構築される機械可読形式の資料および研究成果は，専門分野を問わず本研究所内外の研究者に広く利用してもらうために公開する予定である。

赤松明彦	家本太郎	内田紀彦	岡口典雄	長田俊樹
小野 基	熊谷康雄	児玉 望	榊 和良	佐々木嗣也
高橋孝信	武内紹人	塚本明廣	中川聡史	中谷英明
奈良 毅	林佳代子	保坂修司	三浦 徹	矢野道雄
山下博司				

カンボジア事典編纂のための基礎的研究（峰岸真琴）（所員 2 名，共同研究員 9 名）

本プロジェクトの設立目的は，カンボジアについて，言語，歴史，民族，民俗，文化，政治，経済，社会等のあらゆる分野において，いわゆる百科事典的な基本的情報を集積していることにあります。これと並行して，カンボジアに関する基礎的データの充実に役立つような，現在各分野において入手可能な文献，資料のデータベースを作成することも企画しています。

将来的にはその成果を，電子メディアを含む何らかの事典の形式にまとめることを構想しています。

石澤良昭	伊東照司	友田 錫	野副由美子	林 行夫
吹抜悠子	福田権一	三上直光	本橋 栄	

言語文化データベースの研究とC A I 開発 (町田和彦) (所員 7 名, 共同研究員 7 名)

本プロジェクトの目的は、アジア・アフリカの言語を中心とした、多様な文化についての情報をデータベース化するための研究と、そのデータを利用して言語文化教育のためのC A I 教材を開発することにあります。

アジア・アフリカの言語の大部分は、「特殊な」言語と見なされ、極めて限られた学習の機会しかないのが現状です。また、その話されている地理的、文化的環境が、日本のそれとは大きく違うため、学習内容の理解が困難になることもあります。特に服装、行事、住居など言葉による説明よりも、写真や映像にしたものを見たほうが理解が早いものもたくさんあります。

また、言語学習そのものについても、テープレコーダによる録音材料だけでなく、ビデオや写真を組み合わせて構成した教材のほうが効果的なのは当然ですが、そのような教材を開発するには、言語、文化に関する画像、映像資料を常に収集、蓄積し、それを構造化して、いつでも利用可能なデータベースにしておかなければなりません。また、必要な資料を効率よく取り出し、それを有機的に結合して、教育用のC A I ソフトを開発するには、一定のノウハウの蓄積が必要です。

本研究所では、科学研究費補助金による、昭和63年度から平成4年度までの自動化研修システムの試作の成果を踏まえ、新たに平成6年度から、言語文化情報のC A I 化の研究が進められており、4言語、4地域の言語文化情報の実用化を目指しています。

本プロジェクトでは、より多くのアジア・アフリカ地域の言語と、その文化的環境を対象にして、

- (1) C A I 開発の資料となる言語・文化情報資料の理論的研究
- (2) 実際のC A I のプラットフォームとなるハードウェア構成の検討
- (3) 現実に稼働しているC A I 設備の見学、研究
- (4) C A I システムの制作とその発表、評価
- (5) 効果的なプレゼンテーション、ユーザーインターフェースの研究

を行い、実用的な言語文化に関する自動化研修システムの製作と運用を目指します。

A. ヘンドリッヒ 岩居弘樹 大野仁美 坂本比奈子
武井直紀 益子幸江 山内譲二

広域言語文化第一部門

アジア人移民社会の研究—特にインド人(南アジア人)コミュニティーを中心に

(内藤雅雄) (所員2名, 共同研究員12名)

このプロジェクトは古くから世界の広範な地域に移民として出ていったインド人(パキスタン系・バングラデシュ系の人々も含め南アジア人と総称)のコミュニティーを対象としています。彼らが移民先でどのようなコミュニティーを形成してきたのか、またそのコミュニティーが受け入れた国(社会)全体の中でどう位置づけられてきているのかを政治学・経済学・歴史学・言語学・文化人類学など学際的な共同作業として考察しようとするものです。

彼らは移民の時期や動機は様々に異なりますが、世界各地に広がっていきました。そして時に先住の人々との間にそごや対立を生み出したり、また不可避免的にホスト社会の社会的、文化的影響にさらされながらも、言語、宗教、カーストなどさまざまな伝統的な価値や慣習の維持につとめ、独自のアイデンティティを創出してきました。本研究所では、インド人(南アジア人)の各地各国におけるこうした移民コミュニティー形成の歴史をつぶさに再構築し、次いで、現在の彼らのコミュニティーのあり方を、現地調査データなどを基にしながら研究し、最終的報告書を作成します。

宇佐美久美子	木曾順子	古賀正則	澤 滋久	富永智津子
中村平治	長谷安朗	浜口恒夫	松井 透	三宅博之
山本由美子	脇村孝平			

東アジアの社会変容と国際環境 (中見立夫) (所員5名, 共同研究員29名)

近年における国際情勢の変化と学术交流の発展によってわれわれ歴史学研究者は東アジア各地域の文書館・図書館などに所蔵される一次資料に対し、以前とは比べられないほど容易に、接近できるようになりました。さらに、現地学界でも、あらたな歴史評価・研究動向がおこり、われわれの研究への刺激となっています。ただ対象とすべき史料の量はあまりに膨大で、その情報を体系的に把握していません。また、個別の研究が深化するとともに、より大きな視野のもとに、問題をとらえなおし、分析枠組みを検討することが必要です。

本プロジェクトでは、このような研究状況を念頭におきながら、18世紀から20世紀初頭の東アジア世界各地における社会の変容が、外部世界とどのように有機的に関連していたかという問題を中心にすえ、文書史料によりそれがどこまであきらかにできるか検討しています。アジア史に関する史料と研究情報の開かれたフォーラムをめざします。

毎回テーマをかえながら、海外からの参加者もまじえ、シンポジウム形式で研究会を開催していきます。

赤嶺 守	石井 明	石橋崇雄	石浜裕美子	伊藤秀一
井上裕正	井村哲郎	江夏由樹	岡 洋樹	尾形洋一
小野和子	笠原十九司	加藤直人	岸本美緒	楠本賢道
佐々木揚	邵健国	坪井善明	中村 義	西村成雄
萩原 守	浜下武志	原 暉之	藤井昇三	松重充浩
毛里和子	森川哲雄	森山茂徳	柳澤 明	

言語文化接触に関する研究 (中嶋幹起) (所員 5 名, 共同研究員17名)

東アジアに共生する幾多の民族の言語は多様性に富み、その長い歴史と相まって、多くの言語資料が集積されています。さらに、近年は中国やソ連などの開放政策により学術成果も公にされつつあります。本プロジェクトでは、満州語、モンゴル語、エウエンキ語、漢語、ウイグル語、チベット語、白語等の言語研究者が現地調査での成果を報告し、それぞれの研究について、言語学のみならず、文化人類学、歴史学などの分野を含めた多角的かつ広域的視点から討論をおこないつつ、言語のダイナミックスを探ります。

鵜殿倫次	大江孝男	落合守和	栗林 均	高田時雄
武内房司	津曲敏郎	西 義郎	樋口康一	藤本幸夫
星実千代	細谷良夫	前川捷三	村上嘉英	森安孝夫
山川英彦	横山廣子			

南東アジアにおける「正統」の波及・形成と変容 (石井 溥)

(所員 5 名, 共同研究員25名)

ユーラシア大陸南東部の多くの文化は、それぞれの基層文化の上にインドや中国の文明の影響を直接、間接に受けつつ形成されてきました。そのようななかで、各文化・社会が自らを「正統的」なものとして作り上げていく傾向はかなり一般的に見られる現象と考えられます。このような「正統」観念はインド文明の及んだ地域では、人間・文化・社会のあるべき姿を指す「ダルマ」という言葉で多く表わされます。

本プロジェクトでは、ヒマラヤ地域、スリランカ東南アジアを主対象地域とし、大文明、特にインド文明との接触によって形成された諸文化のありかたを「ダルマ」の概念を念頭に置きつつ比較考察し、その類似性、多様性を究明し、さらに相違についてはその存在の理由を考えます。

分析対象としては政治組織、都市構造、宗教、宗教図像、社会構造、日常生活などの側面を取り上げ基層文化にも十分な注意を払います。

なお、ここでいう「南東アジア」とは、アジアのなかでカシミールより東および南に位置する諸地域をさします。

飯島 茂	井狩彌介	永ノ尾信悟	奥手龍二	鏡味治也
------	------	-------	------	------

鹿野勝彦	小林正夫	島 岩	鈴木正崇	関根康正
高谷紀夫	立川武蔵	田中雅一	長野泰彦	西 義郎
西村祐子	藤井知昭	マハラジャン・ケシャブ・ラル	三尾 稔	
南真木人	森 雅秀	安野早己	山本真弓	山本勇次
結城史隆				

東南アジアにおける「共存」「共生」の思想 (栗原浩英) (所員 5 名, 共同研究員12名)

1980年代後半にはいり、東南アジア地域の大部分の国が権威主義体制の動揺、カリスマ的指導者の高齢化、経済発展に伴う中間層の成長、社会主義陣営の崩壊と冷戦の状況の終結など様々な理由により、政治的変動に直面しています。その中で顕在化してきたひとつの現象に、「民主化」・「和解」などの語に象徴されるような、自らとは異質な集団の存在を認めようとする「共存」志向があります。

本プロジェクトは、これまで対決、闘争、植民地化、統合・被統合、支配・被支配、統治者・被統治者などの観点からとらえられることの多かった東南アジア地域の歴史や社会を、「共存」・「共生」の主体として国家、中央と地方、地域、エスニシティー、政治(イデオロギー)集団、利益集団、宗教集団など多様なレベルを設定し、積極的に学際的なアプローチを導入することによって、所期の課題の実現を目指していきます。

プロジェクトの継続期間は3年間とし、最終年度には成果を刊行する予定です。

石井和子	加藤久美子	川島 緑	小泉順子	白石昌也
末廣 昭	高田洋子	高谷紀夫	林 行夫	弘末雅士
古田元夫	宮本謙介			

個別言語の音韻・形態・統語データの分析・記述と言語類型論 (林 徹)

(所員14名, 共同研究員37名)

この共同研究プロジェクトは、各参加者が自分が専門とする言語の音韻・形態・文法データを持ち寄り、それらを他の言語の研究者と一緒に分析することにより、そのデータから得られる知見を、その言語の専門家でない研究者との間で共有できるような、できるだけ一般的な形で提示するための分析・記述方法を開発することを目的としています。こうした作業を通し、最終的には、個別言語の研究者自らが、言語類型論の研究者の協力を得て、言語類型論の視点から自らの研究を再検討し、個別言語の研究と言語類型論の研究の双方にとって最適の言語研究のパラダイムを構築することをめざしています。今年度は、昨年度までの「与格」に続き、「所有表現」および「属格」をテーマとし、さらに、個別言語データを広く共有する具体的な方法のひとつとして、コンピュータ・コーパス利用法も取り上げる予定です。

相澤正夫	井出祥子	井上 優	宇佐美 洋	上野善道
梅田博之	遠藤 史	大江孝男	大堀俊夫	岡田公夫

小川暁夫	生越直樹	尾上圭介	岸田泰浩	児玉 望
坂原 茂	佐久間淳一	柴谷方良	田窪行則	田野村忠温
柘植洋一	土田 滋	角田太作	中川 裕	奈良 毅
西村義樹	仁田義雄	福井 玲	星 泉	町田 健
松村一登	松本克己	松森昌子	箕浦信勝	宮岡伯人
守野庸雄	湯川恭敏			

前近代東南アジアの歴史認識と価値観 (池端雪浦) (所員 2 名, 共同研究員 9 名)

本プロジェクトは、1991～93年度に実施した共同研究プロジェクト「東南アジア史像の変革」を継承するものです。先のプロジェクトで、東南アジア前近代史の研究は、方法論の革新や新しいデータの発見で、従来にない進展を見せていることが明らかになりました。しかし、前近代東南アジアの認識世界、とりわけ総合的歴史理解に不可欠の歴史認識や価値観のありようは、いまだに限られた研究しかありません。それには歴史史料の制約も一つの障害になっています。

本プロジェクトでは、この地域で19世紀まで書き続けられてきた、叙事詩・年代記・宗教説話などのいわゆる古典文学を中心にして、これらのテキストに記述された「歴史」の構造や価値体系を分析し、それぞれの地域と時代の歴史認識・価値観のありようを読み解く研究を進めます。

3年計画で、本年度は第1年目です。

青山 亨	飯島明子	石井米雄	今井昭夫	宇戸清治
原田正美	深見純生	土佐桂子	山本達郎	

西南中国非漢族の歴史に関する総合的研究 (クリスチャン・ダニエルス)

(所員 5 名, 共同研究員 12 名)

現在の西南中国は、もともと非漢族の居住地域であり、中国歴代王朝の支配下に少しずつ組み込まれていく歴史をもつ地域である。元明清を通じて、漢民族移民の増大と歴代王朝の統治政策によって、より多くの非漢族が中央政府に直接支配されるようになり、そのことによって民族移動が激しくなり、非漢族の土着社会に大きな変容が起こり、東南アジア大陸部へ移住する非漢族も出現した。だが、従来この歴史過程を総合的に分析する研究は僅少であった。

本プロジェクトの目的は、(1) 西南中国非漢族の歴史に関する研究発表、(2) 史(資)料の発掘・収集・整理を行うことによって、従来注目されることのなかったこの地域の歴史に対する研究を促進することにある。なお、方法論として非漢族を主体とした分析視点を重視すると同時に、歴史学者以外に文化人類学、民族学、民俗学、言語学などの専門家の参加によって学際的なアプローチの構築を目指す。

上田 信	菊池秀明	岸本美緒	末成道男	武内房司
------	------	------	------	------

多田 狷介 谷口 房男 張士 陽 塚田 誠之 寺田 浩明
吉野 晃 渡部 武

広域言語文化第二部門

アフリカにおける都市化の比較研究（日野舜也）（所員11名，共同研究員38名）

本研究は、現代アフリカにおいて進行するもっとも大きな社会変化である都市化と地域形成の問題について、国民社会形成，都市社会の構造，都市-村落関係の展開，地域共通文化，リングアフランカ（地域共通語）の機能等の関連において，長期のフィールドワークをともなう，長期継続的な比較研究をおこない，その資料にもとづいて動態的に解明しようとするものである。

赤阪 賢	阿久津昌三	池谷和信	上田 将	上田富士子
江口一久	小川 了	小倉充夫	勝俣 誠	門村 浩
菊地滋夫	栗本英世	小馬 徹	坂本邦彦	嶋田義仁
清水紀佳	白井和子	鈴木裕之	禅野美帆	店田廣文
戸田真紀子	富川盛道	富永智津子	野元美佐	原口武彦
福井勝義	古田優美	前山 隆	松園萬亀雄	松田素二
宮治美江子	宮本正興	吉田昌夫	米田信子	米山俊直
和崎春日	和田正平	渡部重行		

イスラム圏における異文化接触のメカニズム—人間動態と情報に関する総合的研究（家島彦一）（所員10名，共同研究員34名）

（目的）

過去5年間にわたる研究プロジェクト「市の比較研究」と国際学術研究「イスラム圏における市の比較研究」（平成元年～平成3年実施）の成果をふまえて，人間動態のダイナミズムとそれにともなう言語文化接触の諸態様を総合的に分析・研究します。

最近の世界情勢を念頭に，国家体制の解体，社会経済の変動，民族・宗教対立などの状況と人間動態情報交換のあり方について，年2～3回の総合研究会と月1回程度の小研究会を行っています。

（研究の内容）

- ①人間の地理的・社会的移動と言語・文化接触の流動現象（mobility）を「人間動態」としてとらえる。
- ②人間動態の諸要因およびその態様と影響について言語学・歴史学・人類学・地理学などの諸分野から学際的に分析・研究する。
- ③人間動態にともなっておこる言語文化適合（不適合）に関する事例研究。
- ④複数の言語圏を統合するような共通言語の機能，複数の文化圏の基底に共通して存

在する物質・生活複合や社会・文化共生の諸側面について検討する。

- ⑤人間や情報の移動を支えるような受け渡しシステムあるいは社会の中で情報やモノの交換・接続の役割を果たす要素についての比較研究を行う。
- ⑥プロジェクト研究会と連動して、国際学術研究「イスラム圏における人間移動と共生システムに関する調査研究」を実施する。(3年計画)
- ⑦研究プロジェクトは計5ケ年にわたって継続する予定である。

赤堀雅幸	新井政美	医王秀行	大塚和夫	大月康弘
奥田 敦	片倉もとこ	加納弘勝	川瀬豊子	私市正年
北川誠一	小林春夫	小松久男	佐藤幸男	佐原徹哉
清水宏祐	清水美保	ジョン・フィリップス		
新谷英治	鈴木 均	高階美行	高山 博	店田廣文
寺島憲治	戸谷 浩	中川聡史	永田雄三	長谷部史彦
羽田 正	濱田正美	堀内正樹	松田俊道	松原正毅
三木 亘				

アフリカ言語学の諸問題 (梶 茂樹) (所員6名, 共同研究員13名)

アフリカには、約5億の人が2000の言語を話して生活しています。中には、話し手の数が1千万人を越える大言語もありますが、その多くは、話者数万から数10万の小言語(いわゆる部族語)です。

1960年代以降、アフリカにおける言語記述が急速に進み、現在アフリカ諸語は世界の言語学に対していくつもの重要な理論的課題を提供するに至っています。一方、日本においても、言語研究はアフリカ研究の初期の段階から係わってき、また、かなりの数の研究者が専門的に調査、研究を行ってきたにもかかわらず、その組織化が遅れ、個々の研究にたいしては海外からの評価も高いのですが、全体としてはまだ力を出しきっていないうらみがあります。

本研究プロジェクトは、この障害を克服すべく日本のアフリカ諸語研究者を一同に集め、アフリカ諸語を題材とした理論的、実践的、また社会・政治との関係など、言語をめぐる諸問題を討議し、ひいては日本のアフリカ言語学を世界の言語学の一部として正當に位置づけることを目標とします。

小森淳子	桜井 隆	清水紀佳	砂野幸稔	竹村景子
中川 裕	中島 久	西江雅之	稗田 乃	宮本正興
宮本律子	守野庸雄	湯川恭敏		

物語の発生学—アラビアン・ナイトをめぐって (西尾哲夫)

(所員14名, 共同研究員27名)

アラビアン・ナイトが中東・イスラム世界の民衆文化の研究にとってはもちろん、民

話研究を含めた物語学一般にとっても最高の資料であることはあらためて強調する必要もないでしょう。アラビアン・ナイトは、ヨーロッパのオリエンタリズム的嗜好が創った西欧文学の不可分の要素として、ヨーロッパとオリエントを相補的に映す鏡でもあります。

本研究では、まずアラビアン・ナイトの誕生と変容に焦点をあて、中世的語りの世界におけるアラビアン・ナイトの生態を見極めたいと思います。その上で、物語がいつどのように発生するのかについて考えるつもりです。「語り」の形態＝媒体が文字テキストと音響映像に分化した現代、特に文学が《書物》として個人空間に閉じ込められた現代において、その分化以前の物語を体現したアラビアン・ナイトについて語ることは、コミュニケーション（＝語り）媒体のモジュール的合体の総和、つまり原初的な語りへの回帰と捉えることもできるマルチメディアの未来を、いわば遡行的に描くことにもつながります。

本研究は、ロンドン大学SOASとAA研の共同研究である民話のOral Archive（民話タイプ・モチーフ索引付音声・文字情報統合化データベース）構想の一環でもあります。

尚、本プロジェクトと並行して、国際学術研究（共同研究）『アラブ遊牧民の移動と環境適応メカニズムの研究－「水」が創る文化と社会－』（3ケ年）を実施します。

菟原 卓	大塚和夫	大稔哲也	岡崎桂二	萩野アンナ
奥西俊介	奥野克巳	川床睦夫	神郡悦子	小杉 泰
小松和彦	近藤二郎	杉田英明	鈴木孝典	高階美行
永田雄三	中務哲郎	中西 裕	難波雅紀	奴田原睦明
堀内正樹	三浦 徹	水野信男	三原幸久	森高久美子
森本公誠	吉村作治			



犠牲祭の一斉礼拝を終えてモスクから出てくる父親を待つウイグル人少女たち。祭り向けに着飾っている。新疆・カシュガルにて。
(新免 康)

国際学術交流

外国人研究者の招聘

本研究所は、国際的な学術交流・共同研究を推進するために、外国からアジア・アフリカの言語文化の専門家を外国人研究者として受け入れ、研究の便宜を供与しています。比較言語文化論研究部門ならびに言語文化情報研究部門の情報開発分野は、外国人研究者を客員として受け入れるためのポストです。このほか日本学術振興会や国際交流基金の招聘計画などで来日する外国人研究者を、随時受け入れています。この3年間に外国から受け入れた研究者は以下のとおりです。

1993	王輔世	中国	言語学
	Jean Léopold Diouf	セネガル	言語学
	David P. B. Massamba	タンザニア	スワヒリ語学, 比較バンツール言語学
	Peri Bhaskararao	インド	言語学, 音声学
	Nai Pan Hla	ミャンマー	モン語学
	Bernard Comrie	イギリス	言語学
	Lydia N. Yu-Jose	フィリピン	国際関係論
	Victoria A. Temu	タンザニア	芸術学
	金昌南	中国	日本語学
	1994	M. G. S Narayanan	インド
Chob Kacha-ananda		タイ	文化人類学, 民族学(タイの山地民族, 特にヤオ族について)
Daniel Joseph Mkude		タンザニア	言語学(一般言語学, スワヒリ語学)
Bando Bhimaji Rajapurohit		インド	言語学, 音声学
Ram Adhar Singh		インド	比較言語学(インド・アーリア諸語), 辞書編纂学
1995	Lydia N. Yu-Jose	フィリピン	国際関係論
	Askari Pashai	イラン	政治学, 教育学
	Doan Thien Thuat	ベトナム	言語学
	尹紹亭	中国	文化人類学
	Austin Peter Kenneth	オーストラリア	言語学
	Annamalai Elayaperumal	インド	言語学
	Wazir Jahan Karim	マレーシア	社会人類学
	Haryo Suhardi Martodirdjo	インドネシア	社会人類学
	Akhundov Agamusa	アゼルバイジャン	言語学
	Trias i valls Maria Angels	スペイン	社会人類学

外国研究機関との共同研究

本研究所は、かねてより海外の研究機関と研究資料・情報の交換、研究員の相互交流、共同研究調査の実施等を通じ学問上の国際協力を進めてきましたが、最近はさらにこれらの機関のいくつかと正式に学術協定を結び、国際協力の一層の充実をはかろうとしています。

これまでに学術協定を結んだ研究機関名と締結年および共同で実施した事業等は、以下の通りです。

外国機関名 (略号)	締結年	国名
国立科学技術研究機構 (ONAREST) 1978年 (現・高等教育・情報科学・科学研究省(MESIRES))	1978年	カメルーン
1969年から1976年の文部省科学研究費補助金による現地調査「アフリカ部族社会の比較調査」(研究代表者・富川盛道教授)におけるカメルーンとの共同研究にさいして、双方において、研究協力協定の必要性が認識され、1978年9月、カメルーン国立科学技術研究機構の人文科学研究所所長、Samuel Ndoumbe-Manga氏をまねき、本研究所において協定が締結された。		
協定締結後の共同研究、所員の現地における共同研究(1980-81, 82, 84, 86):カメルーン研究者の現地調査参加(1982, 84, 86, 87, 89, 90, 91):本研究所におけるカメルーン研究者の成果刊行、単行本8冊(<i>African Languages and Ethnography</i> シリーズ), 論文1点(Sudan Sahel Studies)。		
インド諸語中央研究所 (CIIL)	1987年	インド
CIIL 所長本研究所訪問(1983), 副所長来訪(1985), 所員来所, 共同研究(1984-85, 1991-92):本研究所所員 CIIL 訪問(1982, 87, 88, 89, 91, 92):共同研究プロジェクト「南アジア諸言語の研究とそのデータベースの作成」を実施, 共同研究年次報告書発行(1990, 91, 92)。		
インド統計研究所 (ISI)	1987年	インド
ISI 特別客員研究員本研究所来所, 共同研究(1985-86), 経済研究部長来訪(1988):本研究所所員 ISI 訪問(1987, 88, 89, 90, 91):共同研究プロジェクト「電算機補助によるラビンドラナート・タゴールの言語の分析的研究」を実施中(1987-):電算資料シリーズ3冊発行(1987, 88, 90)。		
チベット言語文化研究所 (LCAT)	1988年	フランス
敦煌の古代チベット語文献のデータベース化をおこなっているが、その一部の KWIC 索引は、 <i>Choix de Documents Tibetains à la Bibliothèque Nationale III Corpus Syllabique</i> として、フランス国立図書館から1990年に出版された。		
人文科学研究所 (ISH)	1990年	マリ
文部省科学研究費補助金による現地調査「ニジェール川大湾曲部諸文化の生態学的基盤および共生関係の文化人類学的研究」を継続的に実施し、その成果を <i>Boucle du Niger : Approches multidisciplinaires</i> Vol. 1. (1988), Vol. 2. (1990), Vol. 3. (1992) として刊行した。		

国 際 学 術 研 究

本研究所は、その性格上、アジア・アフリカの現地調査をおこなうことを、重要な研究課題の一つにしています。過去5年間に、文部省科学研究費補助金（国際学術研究）で、本研究所員が組織した研究は以下のとおりです。

- 1) ニジェール川大湾曲部諸文化の生態学的基盤および共生関係の文化人類学的研究
1986年, 1988年, 1990年, 1992年, 1993年 (川田順造)
- 2) アフリカにおける都市化の比較調査—とくに, 地域形成・国民社会形成との係わりにおいて—
1989年, 1990年, 1991年 (日野舜也)
- 3) イスラム圏における市の比較研究—異文化接触のメカニズム—
1989年, 1990年 (上岡弘二), 1991年 (永田雄三)
- 4) 中国周辺部における言語接触と社会文化変容—漢族文化と非漢族文化との相互関係—
1990年, 1991年, 1992年 (中嶋幹起)
- 5) 電算機補助による南アジア諸言語の研究
1991年, 1992年 (奈良 毅)
- 6) 多民族国家マレーシアにおける「共同体」の総合的研究
1991年, 1992年 (宮崎恒二)
- 7) アフリカにおける伝統都市の社会変化の比較調査
1993年, 1994年 (日野舜也)
- 8) 電算機補助による南アジア諸言語の比較・対照研究
1993年, 1994年 (奈良 毅)
- 9) アフリカにおける「音文化」の比較研究
1994年, 1995年 (川田順造)
- 10) 東アジアにおける情報伝達と人間移動—南北の比較研究—
1994年, 1995年 (中嶋幹起)
- 11) 南部アフリカ地域の諸言語の言語学的記述・比較研究
1994年, 1995年 (加賀谷良平)
- 12) イスラム圏における人間移動と共生システムに関する調査研究
1994年, 1995年 (家島彦一)
- 13) アラブ遊牧民の移動と環境適応メカニズムの研究—「水」が創る文化と社会—
1995年 (西尾哲夫)

なお、このほか各種財団の助成金による海外学術調査も組織されています。「海上ルートを通じた東西の文化的・経済的交流—インド洋周辺の港市遺跡の調査—」(研究代表者・家島彦一, 1984-85), 「フィリピン・フォークカトリシズムの歴史人類学的研究」(研究代表者・池端雪浦, 1984-87) などがその一部です。

「国際学術研究に関する調査研究」(通称「国際学術研究総括班」)の活動

このほかに文部省科学研究費補助金(国際学術研究)を受けている「総括班」は、本研究所所長を代表者とし、他の様々な機関に所属する研究者によって組織され、本研究所に事務局において、科学研究費(国際学術研究)にかかわる研究者・研究組織相互間、および研究者側と文部省の間の情報交換、連絡調整などの活動をおこなっています。活動の主なものとしては、科研費(国際学術研究)で海外に派遣される研究組織の代表者を集めて情報交換をおこなう「研究連絡会」の開催や国際情勢に即応した研究調査を可能にするための「学術研究体制調査のための海外派遣」および『海外学術調査ニュースレター』(年3回)の出版があります。

長期研究者派遣

アジア・アフリカの言語文化の研究にとって、各地域で話されているさまざまな言語の修得が必須であることは言うまでもありません。本研究所では助手等の若い研究者をそれぞれ2年の期間、アジア・アフリカの諸国に派遣しています。この現地投入は、言語を自由に話し、あるいは読み、書く能力を獲得するだけでなく、長期間現地の生活にとけこむことによって、その地域の文化や歴史の研究に対する幅広い視点を身につけることを目的としています。この計画は1967年から実施され、現在までに合計28名が派遣されました。

- 1967年—1969年 石垣幸雄 (エチオピア), 守野庸雄 (タンザニア)
1969年—1971年 松下周二 (ナイジェリア), 家島彦一 (アラブ連合)
1971年—1973年 内藤雅雄 (インド), 中野暁雄 (モロッコ, 南イエメン)
1973年—1975年 福井勝義 (ソマリア), 中嶋幹起 (香港)
1975年—1977年 加賀谷良平 (ボツワナ), 湯川恭敏 (タンザニア, ザイール)
1977年—1979年 石井 溥 (ネパール), 藪 司郎 (ビルマ)
1979年—1981年 羽田亨一 (イラン, トルコ), 清水宏祐 (アラブ連合, イラン, トルコ)
1981年—1983年 山本勇次 (ネパール), 新谷忠彦 (ニューカレドニア)
1983年—1985年 辻 伸久 (中国, 香港), 水島 司 (インド)
1985年—1987年 中見立夫 (中国, モンゴル), 梶 茂樹 (ザイール, ケニア, ザンビア)
1987年—1989年 松村一登 (フィンランド, ソ連), 宮崎恒二 (オランダ, インドネシア)
1989年—1991年 林 徹 (中国, トルコ), 栗本英世 (エチオピア, ケニア)
1991年—1993年 栗原浩英 (ベトナム, ロシア), 峰岸真琴 (インド)
1993年—1995年 新免 康 (中国, 独立国家共同体, イギリス), 根本 敬 (イギリス, タイ)
1995年—1997年 飯塚正人 (エジプト, イギリス), 黒木英充 (シリア, フランス)



ビルマの田舎の典型的「ガソリン・スタンド」。民間レベルでは少量の配給以外は闇でしか手に入らない貴重なガソリン。一見ふつうの雑貨屋が、「客」が来るとこうして原始的な方法でガソリンを売っている。
(根本 敬 1994年12月撮影)

短期共同研究員（公募）

1978年度より、共同研究プロジェクトとは別に、本研究所において一定期間（2週間以上2ヶ月以内）研究をおこなう共同研究員を公募しています。

大学院地域文化研究科博士後期課程

東京外国語大学では、多元化した言語・文化・歴史・政治・経済などを統合し、かつ深く掘り下げうる教育者・研究者の育成という学術的な要請と、国際交流の高度化・複雑化に伴う高度な知識を有する国際的な人材や専門職員の需要に応ずるために、言語教育と地域研究をより高度に発達させた大学院地域文化研究科博士後期課程を平成4年度より設置しました。本研究所では教育体制のこうした発展に協力すべく、本研究所に大学院委員会を設置し、14名（平成7年度）の教官が参加し、言語学・民族学・文化人類学・歴史学などの分野における学生（毎年4名程度）を受け入れ、教育活動に従事することとなりました。

研 究 生

大学卒業かそれと同等以上の学力がある者が研究所で研究に従事することを希望するときは、審査の上研究生として入所を許可します。

研究生は入所料及び研究料を納付し、指定の教官の指導を受けます。



ビルマのナマウ市にある故アウン・サン将軍生家博物館に飾られてある写真。同将軍はビルマ独立運動の最高指導者で、日本軍占領時代には苦しい決断を迫られつつも、母国を最後は解放に導いた。この写真は1943年8月、彼がビルマ国民軍の司令官の時のもの。

（根本 敬 1994年12月撮影）

言語研修

本研究所では、アジア・アフリカ地域の言語の修得のために、本研究所員を中心にその言語を母語とする人、および日本人研究者を講師として、毎年夏、言語研修を開講しています。開講する言語の数は、東京会場が2言語、関西会場が1言語、研修時間は150時間です。最近、言語研修を実施した言語は、次の通りです。(1995年実施決定を含む) 11頁参照

研修言語名(修了者数)

年度	東京会場	関西会場
1980	ネパール語(14), モンゴル語(14)	ベトナム語(5)
1981	ヒンディー語(8), パシュトー語(10)	中国語中級(26)
1982	アラビア語エジプト方言(12), ハンガリー語(17)	フルフルデ語(12)
1983	チベット語(12), フィンランド語(21)	パンジャーブ語(8)
1984	ピリピノ語(タガログ語)(12), ヨルバ語(3)	トルコ語(15)
1985	朝鮮語(14), カンボジア語(10)	スワヒリ語(8)
1986	西南官話(5), タミル語(12)	ベンガル語(8)
1987	中原官話(10), タイ語(19)	シンハラ語(8)
1988	ペルシア語(10), トルコ語(16)	インドネシア語(6)
1989	ベンガル語(20), ベトナム語(9)	アラビア語エジプト方言(15)
1990	朝鮮語(11), インドネシア語(11)	ペルシア語(14)
1991	エストニア語(12), ビルマ語(15)	中国語(13)
1992	ネパール語(12), アラビア語エジプト方言(15)	フィリピン語(12)
1993	朝鮮語(17), グルジア語(17)	モンゴル語(17)
1994	ウォロフ語(9), ヒンディー語(11)	トルコ語(22)
1995	アムハラ語(), チベット語()	上海語()

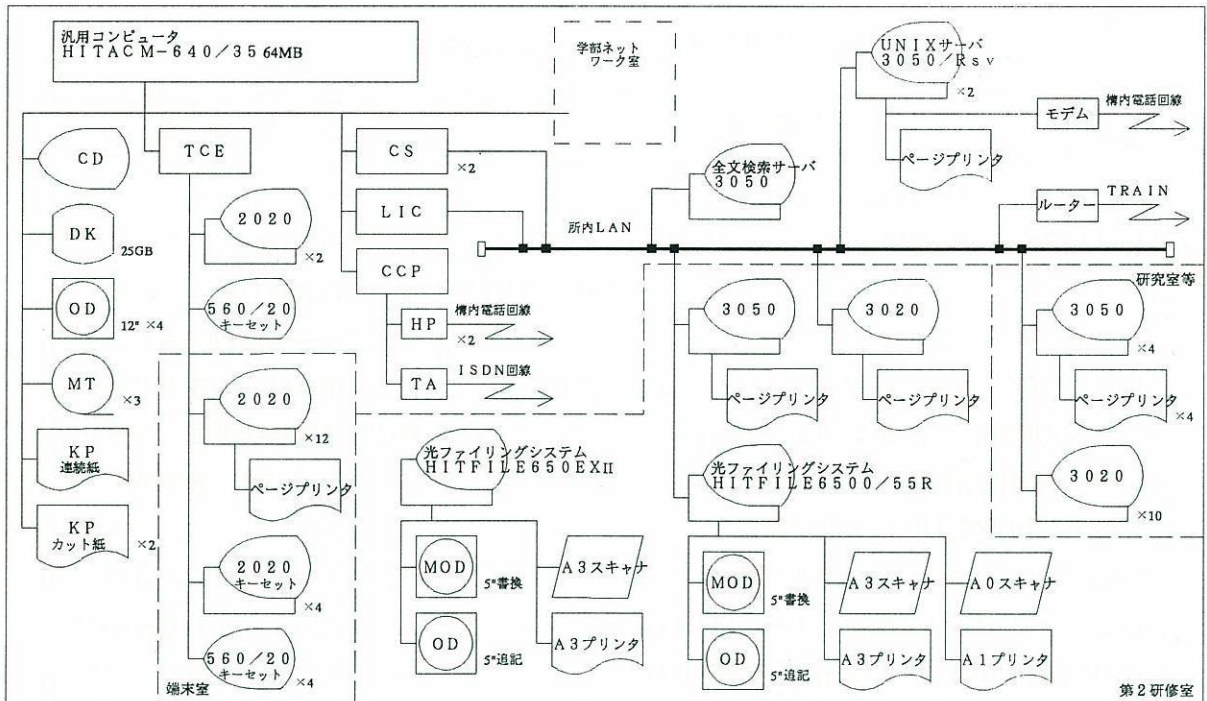
研修生(各言語約10名)は、大学など研究機関を通じて全国から公募します。受講を認められた者は入所料、受講料を納付することになります。また、課程を修了した人には審査のうえ修了書が授与されます。

上記の研修事業と関連して、より効果的で充実した研修方法を開発するための研究の一環として、科学研究費補助金による支援を受けつつ、言語研修において自動学習機器に合わせて機械化する部分をプログラム(CAI)化するための研究を実施しています。この研究によって開発した「CAIプログラム」は、研修コースのなかで補助教材として活用することが期待されるばかりでなく、必要に応じて希望する言語の学習をすすんで個人的に受講できるよう設営し、増大し、多様化する社会的要請に応えうるようにすることを目指すものです。

施 設

電 算 機 室

システム構成図



1978年にメインフレーム・コンピュータを導入以来、何代かの世代交代を経て、現在は HITAC M-640 システムが主機となっています。ハードウェアの面からは、特別なものはありませんが、自然言語処理という唯一の目的に沿って、それに適した構成がなされています。

非ラテン・非漢字系の文字体系を扱うために、文字フォントの作成に始まり、テキストの入力システム、エディタ、レイアウト・プリントアウトなどの、基本となるユーティリティ・ソフトウェアが備えられています。ユーザーはこれらを利用して、インデックスの作成や辞典編纂、データベースの編成、テキスト分析などの処理をおこなうことができます。



図 書 室

日本における唯一の、大学付置の人文科学系共同利用研究所である本研究所は、アジア・アフリカ諸地域の言語文化に関する研究に必要な基礎資料を、1964年（昭和39）の創設以来収集してきました。

対象地域の広域化、研究テーマの複合化、方法論の多様化など、これらの地域に関する研究の諸条件は近年とみに変化していますが、こうした状況を考慮し、内外の諸研究機関から参加する共同研究員や研究生および一般の研究者の需要にも応えるため、幅広い資料の収集に努め、更に海外研究機関（56ヵ国220機関）との寄贈交換による資料を収集しています。1995年（平成7）3月末現在、蔵書総数は82,378冊、マイクロフィルムは8,469リール、マイクロフィッシュ24,005シート、雑誌約1,600種等です。

蔵書のなかには、アジア・アフリカ等諸地域の教科書をはじめ、世界各国語の聖書、イランの主要新聞（19世紀末～1970年のマイクロフィルム：65種）、ベンガル語文芸雑誌（19世紀創刊：5種）のほか、オスマン語劇場ポスター、ナポレオン「エジプト誌：第2版」、19世紀「カイロ石版画集」、晩清（中国）製糖画集等々、他の研究機関には見られない特殊な資料が所蔵されています。

また外国雑誌の収集には、特に留意し、欠号補充等の努力を続けています。

なお、本研究所には現在、下記5種の文庫があります。

① **山本文庫**：1967年（昭和42）受入

著名な満洲語学者、故山本謙吾氏（1920～1965）の個人蔵書で、満洲語・ツングース語関係の諸文献を中心に言語学・音声学・アルタイ語学等に関する諸文献（和・洋書計598冊）を含む。

② **浅井文庫**：1970年（昭和45）受入

著名なオーストロアジア言語学者、故浅井恵倫氏（1895～1969）の蔵書。アジア・アフリカ諸言語の研究書・辞典類・雑誌等（和・洋書計870冊）をはじめ、高砂族関係の貴重な言語資料、ニューギニアの民族写真その他（アルバム、ノート、原稿、書簡、直筆辞書、単語カード、未発表の高砂族伝説集索引カード等）を含む。

③ **小林文庫**：1976年（昭和51）受入

著名なモンゴル史研究者である故小林高四郎氏（1905～1987）の個人蔵書で、モンゴル民族の生活と習俗に関する文献（和・洋書計1,671冊）を含む。

④ **前嶋文庫**：1986年（昭和61）受入

わが国におけるイスラム研究の創立者の一人である故前嶋信次氏（1903～1983）の個人蔵書のうち、和漢書1,272冊を受け入れたもの。イスラム関係のみならず、東洋史、東西交渉史、旅行記などを含む。

⑤ **王文庫**：1993年（平成5）受入

著名な台湾言語学者、故王育徳博士（1924～1985）の個人蔵書で、台湾の言語学、文学、歴史、政治関係の諸文献を中心にしたコレクションである。歌仔戯、1950年代から1980年代にかけて日本で展開された台湾独立運動家が発行した雑誌やパンフレット、台湾で発行された党外雑誌や王博士の手稿など貴重なものを多数含む。（和・中・洋書等計3,163点）。

音 声 学 実 験 室

音声学実験室には、音声言語の性質・特徴や発話の調音状態を観察し記録するために次のような機械が用意されています。

パーソナルコンピュータを用いた音声分析プログラムでは、音声の各時点ごとの構成周波数の変化や強さを濃淡模様で表示するスペクトログラムや基本周波数の抽出ができます。スペクトログラムでは、従来の機械式のそれと同様に、用途に応じてワイド・バンド、ナロー・バンド、セクション、音圧の表示ができるうえに、基本周波数を連続的にプロットして表示することもできます。基本周波数測定は、測定したい範囲を音声波形上に指定してもできますが、スペクトログラム上の範囲指定もできますので、基本周波数と音節との対応が容易になります。もちろん、各時点ごとの測定値も表示できます。画面の時間表示も自由に変えることができますので、数文にわたるピッチ変化のようなデータも、また音節内のピッチ変化のような詳細な測定を要するようなデータも画面に表示できます。1サンプルの最大録音時間はサンプリング周波数やコンピュータのメモリーによって異なりますが、現在のシステムでは10kHzを上限とする測定（20kHzサンプリング）のためのデータで、最大約10分間可能です。さらに、ある音声データを他の音声データの任意の部分に付加したり、またある音声データからその一部を切り取ったりすることも可能ですし、音声データの特定の部分のみを繰り返し聴取することもできます。

エレクトロ・パラトグラフは、舌の調音運動を観察し記録するための機器です。32個の微小な電極を埋めこんだ人工口蓋を発話者の口蓋にはめて、各時点ごとの電極と舌との接触状態を、全面パネルに口蓋状に配列したランプの点滅で示してくれます。もちろん、この点滅表示を特殊用紙に記録することもできます。

このほかに、ビデオテープ編集機やカセットテープを高速に複製するテープ・デュプリケーターが、フィールド調査で録音されたテープの複製作成や言語研修用テープの作成のために用意されています。また、良好な条件での発話資料を録音するために、防音室や各種のテープレコーダーも用意されています。

付属施設の音声・言語研修資料室には、フィールド調査で収集された世界の珍しい言語や貴重な民話、民族音楽などのテープやレコードをはじめ、これまでの言語研修テキストのテープ、アジア・アフリカ地域の諸言語の語学テープとレコードが整理・保管されていて、研究者の利用の便を計っています。

さらに、アジア・アフリカ地域のマルチ・データベースの作成が予定されています。これは、アジア・アフリカ地域の言語文化情報を、映像情報・音声情報・文字情報で提供するデータベースです。例えば、「スワヒリ語での挨拶は？」と尋ねますと、音声と文字による挨拶語とその説明に加え、挨拶時の仕草、表情、情感などを表した映像も同時に提供されます。

出版物一覽

下記の出版物は非売品ですが、著者あるいは編集出版委員会の承認により、研究機関、個人研究者に寄贈することができます。なお、*印のものは在庫がありません。

アジア・アフリカ言語文化研究 *Journal of Asian and African Studies*, Nos. *1 (1968), *2 (1969), *3 (1970), *4 (1971), *5 (1972), *6 (1973), *7, *8, *9 (1974), *10 (1975), *11, *12 (1976), *13, 14 (1977), 15, 16 (1978), 17, 18 (1979), 19, *20 (1980), *21, *22 (1981), *23, 24 (1982), *25, *26 (1983), *27, 28 (1984), 29, *30 (1985), 31, 32 (1986), 33, 34 (1987), 35, 36 (1988), 37, 38 (1989), 39, 40 (1990), 41, 42 (1991), 43, 44 (1992), 45 (1993), 46・47 (創立30周年記念号 1, 1994), 48・49 (創立30周年記念号 2, 1995).

アジア・アフリカ言語文化研究所 通信, Nos.1~83(1966~95).

アジア・アフリカ言語文化叢書

1. ピア・アヌマーン・ラーチャトン著・河部利夫訳註, タイ農民の生活, 1967.
- *2. 家島彦一訳註, イブン・ファドラーンのヴォルガ・ブルガール旅行記, 1969.
3. MATSUSHITA, S., *An Outline of Gwandara Phonemics and Gwandara-English Vocabulary*, 1972.
4. NAKANO, A., *Conversational Texts in Eastern Neo-Aramaic (Gzira Dialect)*, 1973.
- *5. TSUCHIDA, S., *Reconstruction of Proto-Tsouic Phonology*, 1976.
- *6. NAGATA, Y., *Muhsin-zâde Mehmed Paşa ve Âyânlık Müessesesi*, 1976.
- *7. YAJIMA, H., *A Chronicle of the Rasûlid Dynasty of Yemen*, 1976.
8. MCFARLAND, Curtis D., *A Provisional Classification of Tagalog Verbs*, 1977.
9. MCFARLAND, Curtis D., *Northern Philippine Linguistic Geography*, 1977.
10. HASHIMOTO, M. J., *Phonology of Ancient Chinese*, Vol. 1, 1978.
11. HASHIMOTO, M. J., *Phonology of Ancient Chinese*, Vol.2, 1979.
12. KAWADA, J., *Genèse et évolution du système politique des Mosi méridionaux (Haute Volta)*, 1979.
13. BAUTISTA, Maria L., *Patterns of Speaking in Pilipino Radio Dramas: A Sociolinguistic Analysis*, 1980.
14. 石井 溥, ネワール村落の社会構造とその変化——カースト社会の変容——, 1980.
- *15. MCFARLAND, Curtis D., *A Linguistic Atlas of the Philippines*, 1980.
16. YADAV, Kripal C., *Elections in Panjab; 1920-1947*, 1981.
17. El-Araby, S. A., *Teaching Foreign Languages to Arab Learners-Methods and Media*, 1983.
18. KAWADA, J., *Textes historiques oraux des Mosi méridionaux (Burkina-Faso)*, 1985.
- *19. MIZUSHIMA, T., *Nattar and the Socio-Economic Change in South India in the 18th-19th Centuries*, 1986.
20. 中嶋幹起, 湘方言調査報告 上冊, 1987.
21. TUNCOKU, A. M., *Japonya'nin çin Halk Cumhuriyeti'ne Karşı Politikası (1952-1978)*, 1987.
22. BALLARD, W. L., *The History and Development of Tonal Systems and Tone Alternations in South China*, 1988.
- *23. ENRIQUEZ, V. G., *Indigenous Psychology and National Consciousness*, 1989.
24. 中嶋幹起, 湘方言調査報告 下冊, 1990.
25. HARA, T., *Paribar and Kinship in a Moslem Rural Village in East Pakistan*, 1991.
26. NASIRI, Mohammed Reza, *Nâsireddin Şah Zamanında Osmanlı-İran Münasebetleri (1848-1899)*, 1991.
27. SHINTANI, Tadahiko & others: *Textes en Nraa Drùbea*, 1992.
28. 中嶋幹起, 電腦處理 御製増訂清文鑑(第一冊), 1993.
29. 坂本恭章, モン語辞典, 1993.
30. 中嶋幹起, 電腦處理 御製増訂清文鑑(第二冊) 1994.
31. 高知尾 仁, 表象のオリエント—19世紀西洋人旅行者の中東像.

アジア・アフリカ基礎語彙集

- | | |
|-----------------------------|------------------------------|
| 1. 山本謙吾, 満洲語口語基礎語彙集, 1969. | 5. 石垣幸雄, エチオピア比較語彙集, 1974. |
| *2. 梅田博之, 現代朝鮮語基礎語彙集, 1971. | 6. 守野庸雄, スワヒリ語基礎語彙用例集, 1975. |
| *3. 橋本萬太郎, 客家語基礎語彙集, 1972. | 7. 坂本恭章, モン語語彙集, 1976. |
| 4. 和田正平, イラク語基礎語彙集, 1973. | 8. 中嶋幹起, 閩語東山島方言基礎語彙集, 1977. |

9. 奈良 毅, *Avahattha and Comparative Vocabulary of New Indo-Aryan Languages*, 1979.
10. 中嶋幹起, 福建漢語方言基礎語彙集, 1979.
11. 橋本萬太郎, ベエ語語彙集, 1980.
12. 新谷忠彦, ラデ語—ベトナム語—日本語語彙, 1981.
- *13. 藪 司郎, アツイ語基礎語彙集, 1982.
14. 中嶋幹起, 浙南吳語基礎語彙集, 1983.
15. 湯川恭敏, サンバー語語彙集, 1984.
16. 梶 茂樹, *Lexique Tembo I*, 1986.
17. 辻 伸久, 湖南省南部中国語方言語彙集, 1987.
18. 橋本萬太郎, 納西語料, 1988.
19. 中嶋幹起, 山東方言基礎語彙集, 1989.
20. 新谷忠彦, 揚 昭, 海南島門語, 1990.
21. 守野庸雄, 中島 久, スワヒリ語辞典 A~C, 1990.
22. 松下周二, ハウサ語ソコト方言, 1991.
23. 守野庸雄, 中島 久, スワヒリ語辞典 D~J, 1991.
24. 梶 茂樹, フンデ語語彙集, 1992.
25. 守野庸雄, 中島 久, スワヒリ語辞典 K~L, 1993.
26. 加賀谷良平, *A Classified Vocabulary of the Sandawe Language*, 1993.
27. 西尾哲夫, *The Arabic Dialect of Qift (Upper Egypt)*, 1994.
28. 中嶋幹起, コンピューターによる北京口語語彙の研究(第一冊 資料編), 1995.
29. 守野庸雄, 中島 久, スワヒリ語辞典 M, 1995.

言語研修テキスト

- *1. チベット語, 北村 甫ほか編, 全5冊(1974).
- *2. 朝鮮語, 梅田博之ほか編, 全3冊(1974).
- *3. カンボジア語, 坂本恭章ほか編, 全5冊(1975).
- *4. ベンガル語, 奈良 毅編, 1冊(1975).
- *5. ビルマ語, 大野 徹ほか編, 全5冊(1976).
- *6. ペルシア語, 上岡弘二ほか編, 全3冊(1976).
- *7. スワヒリ語, 守野庸雄ほか編, 全2冊(1976).
- *8. 広東語, 中嶋幹起ほか編, 全4冊(1977).
- *9. マラーティー語, 内藤雅雄ほか編, 全3冊(1977).
- *10. モンゴル語, 荒井伸一ほか編, 全4冊(1977).
- *11. トルコ語, 永田雄三ほか編, 全3冊(1978).
- *12. タイ語, 坂本恭章ほか編, 全2冊(1978).
- *13. ペルシア語, 勝藤 猛ほか編, 全3冊(1978).
- *14. ハウサ語, 松下周二ほか編, 全3冊(1979).
- *15. ビルマ語, 藪 司郎編, 全3冊(1979).
- *16. ネパール語, 石井 溥ほか編, 全3冊(1980).
- *17. モンゴル語, 小沢重男ほか編, 全2冊(1980).
- *18. ベトナム語, 川本邦衛ほか編, 全4冊(1980).
- *19. 中国語, 大河内康憲編, 1冊(1981).
- *20. ヒンディー語, 田中敏雄ほか編, 全3冊(1981).
- *21. パシュトー語, 縄田鉄男編, 全3冊(1981).
- *22. アラビア語, 中野暁雄, サラーフ・アル・アラビ編, 全2冊(1982).
- *23. ハンガリー語, 岩崎悦子ほか編, 全2冊(1982).
- *24. チベット語, 北村 甫ほか編, 全3冊(1983).
- *25. フィンランド語, 松村一登ほか編, 全3冊(1983).
26. パンジャーブ語, 溝上富夫編, 全3冊(1983).
- *27. ピリピノ語, 池端雪浦, リリア・アントニオ編, 全2冊(1984).
28. ヨルバ語, 清水紀佳ほか編, 全2冊(1984).
- *29. トルコ語, 勝田 茂編, 全3冊(1984).
- *30. 朝鮮語, 大江孝男編, 全3冊(1985).
31. カンボジア語, 坂本恭章ほか編, 全4冊(1985).
- *32. スワヒリ語, 宮本正興ほか編, 全5冊(1985).
33. 西南官話, 橋本萬太郎, 馬真ほか編, 全2冊(1986).
34. タミル語, 山下博司ほか編, 全2冊(1986).
35. ベンガル語, 溝上富夫ほか編, 全3冊(1986).
- *36. タイ語, 森 幹男ほか編, 全4冊(1987).
37. シンハラ語, 中村尚司ほか編, 全3冊(1987).
38. 中原官話, 中嶋幹起, 賀巍ほか編, 1冊(1987).
39. インドネシア語, 森村 蕃ほか編, 全3冊(1988).
- *40. ペルシア語, 上岡弘二ほか編, 全4冊(1988).
- *41. トルコ語, 林 徹ほか編, 全4冊(1988).
42. ベンガル語, 奈良 毅編, 1冊(1989).
43. ベトナム語, 栗原浩英ほか編, 全2冊(1989).
44. アラビア語(エジプト方言), 藤井章吾ほか編, 全2冊(1989).
45. 朝鮮語, 大江孝男編, 全3冊(1990).
46. インドネシア語, 宮崎恒二ほか編, 全3冊(1990).
- *47. ペルシア語, 岡崎正孝, ハーシエム・ラジャブザード編, 全4冊(1990).
- *48. エストニア語, 松村一登編, 全2冊(1991).
49. ビルマ語, 根本敬ほか編, 全3冊(1991).
- *50. 中国語, 杉村博文, 古川裕編, 全4冊(1991).
- *51. アラビア語(エジプト方言), 西尾哲夫ほか編, 全2冊(1992).
- *52. ネパール語, 石井 溥ほか編, 全3冊(1992).
- *53. フィリピノ語, ウィルフレド・ムヤルガス, 大上正直, 津田 守編, 全3冊(1992).
54. 朝鮮語, 梅田博之編, 1冊(1993).
55. グルジア語, 木下宗篤ほか編, 全2冊(1993).
- *56. モンゴル語, 橋本勝ほか編, 全3冊(1993).
- *57. ウォロフ語, ジャン=レオポルド・ジュフ, 梶茂樹, 砂野幸稔編, 全3冊(1994).
58. ヒンディー語, 町田和彦編, 全3冊(1994).

59. トルコ語, 勝田茂, 大澤孝ほか編, 全3冊 資料1. スワヒリ語〈三日坊主コース〉テキスト,
(1994). 守野庸雄編, 1冊(1985).

特定研究「言語」出版物

「文字と言語」研究資料

- *1. HASHIMOTO, M. J., *hPags-pa Chinese*, 1978.
2. 橋本萬太郎編, 東干語文字の音表化(資料集), 1978.
- *3. 橋本萬太郎編, ラテン化新文字(資料集), 1978.
4. 川本邦衛, 現代ベトナム語 漢語・「漢字語」語彙集(I), 1979.
5. SCHAANK, Simon H., *The Lu-Feng Dialect of Hakka*, 1979.
6. 吉田 忠, 蘭学における訳語の考察, 1980.
7. 川本邦衛, 現代ベトナム語 漢語・「漢字語」語彙集(II), 1980.

「AA 諸言語と日本語の学習」資料

- *77-1. 梅田 博之: 基本動詞対照用例集 日本語—朝鮮語1. 1978.
- *77-2. 大河内康憲: 基本動詞対照用例集 日本語—中国語1. 1978.
- *77-3. 坂本 恭章: 基本動詞対照用例集 日本語—タイ語1. 1978.
- *78-1. 梅田 博之: 基本動詞対照用例集 日本語—朝鮮語2. 1979.
- *78-2. 大河内康憲: 基本動詞対照用例集 日本語—中国語2. 1979.
- *78-5. 奈良 毅: 基本動詞対照用例集 日本語—ヒンディー語1. 1979.
- *78-6. 内記 良一: 基本動詞対照用例集 日本語—アラビア語1. 1979.
- *78-7. 守野 庸雄: 基本動詞対照用例集 日本語—スワヒリ語1. 1979.
- 78-8. 梅田博之ほか: 助詞対照用例集1:「の」日本語—AA 諸言語, 1979.
- *79-1ab. 梅田博之ほか: 日本語の発音(朝鮮語を母語とする学習者のための日本語発音教材試案), 1980.
- *79-3. 坂本 恭章: 基本動詞対照用例集 日本語—タイ語2. 1980.
- *79-5. 奈良 毅: 基本動詞対照用例集 日本語—ヒンディー語2. 1979.
- 79-6. 内記 良一: 基本動詞対照用例集 日本語—アラビア語2. 1980.
- *79-7. 守野 庸雄: 基本動詞対照用例集 日本語—スワヒリ語2. 1980.
- 79-8. 梅田博之ほか: AA 諸言語教育基本語彙表, 1980.

共同研究報告

1. アジア・アフリカ諸国における国語教育資料の調査研究—中間報告, 1966.
アジア・アフリカ諸国国語教育資料目録, 1967.
2. アジア・アフリカ言語調査票, 上(1966), *下(1967).
3. 「イスラム化」に関する共同研究報告, Nos.*1(1968), *2(1969), *3(1970), *4(1971), *5(1972), *6(1973), 7(1982), 8・9(1986).
4. 現代インド・パキスタン文学共同研究報告, Nos.1(1970), 2(1971), 3(1972).
- *5. アジア・アフリカにおける宗教運動共同研究報告, Nos.*1(1972), *2(1972), *3(1973).
6. アジア・アフリカ文法研究, Nos.*1(1972), 2(1973), 3(1974), 4(1975), 5(1976), 6(1977), 7(1978), 8(1979), 9(1980), 10(1981), 11(1982), 12(1983), 13(1984), 14(1985), 15(1986), 16(1987), 17(1988), 18(1989), 19(1990), 20(1991), 21(1992), 22(1993), 23(1994).
7. *Asian and African Grammatical Manuals*(アジア・アフリカ文法便覧), 1972~:

No. *11. Korean(梅田博之), 1973. 11z. Sakhalin Ainu(村崎恭子), 1978. *12b. Fukienese(中嶋幹起), 1976. *12z. Tibetan(北村 甫), 1977. 13. Indo-Aryan(石垣幸雄), 1980. 13a. Hindi(溝上富夫), 1980. *13b. Marathi(内藤雅雄), 1976. 13c. Bengali(奈良 毅), 1979. 13d. Khaling(鳥羽季義), 1979, 1984. 13e. Panjabi(溝上富夫), 1981. *13x. Tamil(徳永宗雄), 1981. 13y. Malayalam(伊藤正二), 1978.	*14a. Cambodian(坂本恭章), 1974. *14b. Burmese(藪 司郎), 1974. 14c. Thai(森 幹男), 1975, 1984. *15b. Philippine(山田幸宏, 土田滋), 1975, 1983. *16b. Samoan(小田真弘), 1977. *17. Persian(上岡弘二), 1976. 17b. Baluchi(縄田鉄男), 1981. 17m. Mazandarani(縄田鉄男), 1984. 17p. Parachi(縄田鉄男), 1983. 17s. Shughni(縄田鉄男), 1980. *20. African(石垣幸雄), 1975.
---	---

- No. *21. Swahili(守野庸雄), 1976.
 *22a. Cushitic(石垣幸雄), 1972.
 22b. Ethiopic(石垣幸雄), 1978.
 *23. Hausa(松下周二), 1974.
 *26. Fulfulde(江口一久), 1974.
 33. Romance & Greek(石垣幸雄), 1973.
- 33y. Basque(石垣幸雄), 1979.
 33z. Maltese(石垣幸雄), 1977.
 34a. Albanian(石垣幸雄), 1979.
 *36. Uralic *etc.*(石垣幸雄), 1976.
 40. USSR Major(石垣幸雄), 1980.
8. アフリカ部族社会の比較研究, 1. アフリカ部族社会の特質をめぐって(1971), *2. アフリカ社会の地域性(1973).
- *9. トルコ民族とイスラムに関する共同研究報告, 1(1974).
10. アジア・アフリカ語の計数研究, *1(1975), *2(1975), *3(1976), *4(鄒 嘉彦, 老乞大諺解単字索引, 1976), *5(坂本恭章, カンボジア語小辞典, 1976), *6(1976), *7(1977), *8(1978), *9(1978), *10(1979), *11(1979), *12(YUE, Anne O., *The Teng-xian Dialect of Chinese*, 1979), *13(1980), *14(藍清漢, 中国語宜蘭方言語彙集, 1980), 15(SHERARD, Michael, *Synchronic Phonology of Modern Colloquial Shanghai*, 1980), 16(1981), *17(傅懋勤, 納西族图画文字《白蝙蝠取經記》研究〈上冊〉, 1981), *18(徐琳・木玉璋, 僰僰族《創世紀》研究, 1981), 19(1982), 20(SHERARD, Michael, *A Lexical Survey of the Shanghai Dialect*, 1982), *21(1983), *22(1984), 23(傅懋勤, 納西族图画文字《白蝙蝠取經記》研究〈下冊〉, 1984), 24(1985), 25(ポール K.ベネディクト, 突破口: 東南アジアの言語から日本語へ—日の神の民の起源, 1985), 26(1986), *27(徐琳, 白族《黄氏女对經》研究, 1986), 28(1987), *29(徐琳, 白族《黄氏女对經》研究〈続〉, 1988), 30(1988).
- *11. *Oceanic Studies*, No.1(1976).
- *12. インド・パキスタン分離独立の史的研究 資料集*1(1976), *2(1977).
13. 南アジアの大河流域における農村社会の研究: 南アジア農村社会の研究, *1(1977), 2(1978), 3(1979), 4(1979), 5(1980), 6(1985), *7(1987), 8(1987).
14. ヒマラヤ・チベットの生態・言語・文化に関する総合研究: YAK, *1(1977), 2(1978), 3(1979), 4(1980), 5(1981), 6(1982), 7(1983), 8(1987).
15. アフリカ社会の形成と展開—地域・都市・言語(1980).
16. 日本の言語文化研究リプリント・シリーズ, No.1(飯島 茂, 日本からみた“*Thailand: A Loosely Structured Social System.*” 1981), No.2(岡田英弘, 中国のなかの日本, 1982).
17. *Phraseological Questionnaire*, 石垣幸雄 Vol.1, Nos.1~2, (*Aquatic Idiomatics*, 1982), Vol.3, No.1 (*Proverbial*, 1981).
18. *Performance in Culture*, No. 1 (BEEMAN, William O., *Culture, Performance and Communication in Iran*, 1982), *No. 2(AWASTHI, Suresh, *Drama: The Gift of Gods—Culture, Performance and Communication in India*, 1983), *No. 3(NAGASHIMA, Y. S., *Rastafarian Music in Contemporary Jamaica—A Study of Socioreligious Music of the Rastafarian Movement in Jamaica*, 1984), No. 4(AND Metin, *Culture, Performance, and Communication in Turkey*, 1987), No. 5(OCHIAI, KAZUYASU, *Meanings Performed, Symbols Read: Anthropological Studies on Latin America*, 1989), No. 6(RAZ, Jacob, *Aspects of Otherness in Japanese Culture*, 1992).
19. *Nationalism in Asia and Its International Relations*. No. 1(*Transformation and Peasant Movements in Contemporary Asia*, 1985), No. 2(アジア政治の展開と国際関係, 1986).
20. 象徴と世界観研究叢書, No. 1(高知尾 仁, 球体遊戯, 1986), No. 2(橋本裕之, 春日若宮おん祭と奈良のコスモロジー, 1986).
21. 南アジアにおける社会集団形成過程に関する比較研究, 1(柳沢 悠, 水島 司, 20世紀初め南インドにおけるカーストと土地保有構造の変動, 1988), 2(KARASHIMA, N., SUBBARAYALU, Y. & SHANMUGAM, P., *Vijayanagar Rule in Tamil Country as Revealed Through a Statistical Study of Revenue Terms in Inscriptions*, 1988), 3(KARASHIMA, N., SUBBARAYALU, Y. & SHANMUGAM, P., *Vijayanagar Rule in Tamil Country as Revealed Through a Statistical Study of Revenue Terms in Inscriptions*, Part two (Appendix III), 1989). 4(内藤雅雄編, 近現代南アジアにおける社会集団と社会変動, 1990).
22. 第三世界の大众文化の研究, 1(原 忠彦, インド・マンガの世界観序論, 1988).
23. 多民族国家における異化・同化形態の比較研究: 論集
 No. 1 マレーシア社会論集, *1(1988)
 No. 2 マレーシア社会論集, 2(1989)
 No. 3 マレーシア社会論集, 3(1993)
 No. 4 MIYAZAKI Koji (ed.): *Local Societies in Malaysia*, Vol. 1, 1992.
 No. 5 MIZUSHIMA Tsukasa (ed.): *Local Societies in Malaysia*, Vol. 2, 1994.
24. 多民族国家における異化・同化形態の比較研究: モノグラフ・シリーズ

- No. 1 FUJIMOTO, Helen; *The South Indian Muslim Community and the Evolution of the Jawi Peranakan in Penang up to 1948*, 1988.
- No. 2 水島司, 18~20世紀南インド在地社会の研究, 1991.
- No. 3 板垣明美, マレー人農村の民間医療に関する文化人類学的研究, 1995.
25. AA 研東南アジア研究, 1(世紀転換期における日本・フィリピン関係, 1989), 2(東南アジアのナショナルリズムにおける都市と農村, 1991), 3(Millennarianism in Asian History, 1993), 4(川島 緑, 日本のフィリピン占領関係史料目録, 1993).
26. イスラム圏における異文化接触のメカニズム——市の比較研究——, 1(1989), 2(1991), 一人間動態と情報—3(1993).
27. 辞典編纂, 1(1989), 2(1990), 3(1991), 4(町田和彦, ヒンディー語逆引辞典, 1992), 5(坂本恭章, 奈良毅, B. P. マリック, ラビンドラナート・タゴールの詩「夢見る女」の使用頻度・文脈付語彙集), 6(小野 基・小田淳一, ダルマキールティ著『プラマーナ・ヴァルティカ自註』総語索引, 1993), 7(町田和彦, プレームチャンド作「ゴードーン」KWIC 索引, 1995).
28. 言語文化接触に関する研究, 1(1989), 2(侯 精一, 晋語平遙方言分類語匯, 1990), 3(杜拉爾・敖斯爾・朝克, エウンキ語基礎語彙集, 1991). 4(石明远, 山東省莒县方言, 1992), 5(中嶋幹起編, シンポジウム満州語の言語学的・文献学的研究), 6(中嶋幹起編, 調査報告「中国周辺部における言語接触と社会文化変容—漢族文化と非漢族文化との相互関係—」, 1993), 7(中嶋幹起編, 電腦處理御製増訂清文鑑(第三冊), 1995).
- *29. *Annual Report on CIIL-ILCAA Joint Research Project*, 1(1989), 2(1991), 3(1992), 4(1993), 5(1995).
- *30. アジア・アフリカ言語文化資料の情報処理に関する基礎的研究: 長田俊樹, *A Reference Grammar of Mundari*, 1992. 内田有紀彦, *Studies in Dravidian Phonology*, 1993.
31. South Asians Abroad Series, 1 (KOGA Masanori, ed., *South Asian Community Organisations in East Africa, The United Kingdom, Canada & India*, 1992), 2 (ed. KOGA Masanori, HAMAGUCHI Tsuneo, NAITO Masao, eds., *South Asians in the United Kingdom, Tanzania and Canada*, 1992).
32. 東アジアの社会変容と国際環境: 東アジア史資料叢刊第一輯, 19世紀末におけるロシアと中国—『クラスヌイ・アルヒーフ』所収史資料より, 1993.
33. カンボジア事典編纂のための基礎的研究: 坂本恭章・峰岸真琴, カンボジア研究No.1(1993), No.2(1995).
34. 漢民族と周辺少数民族の文化の接触と変容: *Perspective on Chinese Society Views from Japan*, 1994.

外国人研究者出版物

1. CONSTANTINO, E., *Isinay Texts and Translations*, 1982.
2. EL-ARABY, S. A., *Intermediate Egyptian Arabic; An Integrative Approach*, 1983.
3. 札奇斯欽, 我所知道的德王和當時的内蒙古(一), 1985.
4. 馬真ほか, 西南官話基本文型の記述, 1986.
5. DOWNS, J. F., *Tibetan Pilgrimage*, 1987.
6. 賀 巍, 漢語方言文稿集, 1987.
7. 李 荣, 渡江書十五音, 1987.
- *8. 侯 精一, 晋語研究, 1989.
9. 照那斯圖, 八思巴字和蒙古語文獻 I 研究文集, 1990.
10. 照那斯圖, 八思巴字和蒙古語文獻 II 文獻匯集, 1991.
- *11. Pan Hla, Nai, *The Significant Role of the Mon Version Dharmaśāstra*, 1991.
12. REID, L. A., *Guinaang Bontok Texts*, 1992.
13. VIETZE, H.-P. *Altan Tobči; Text und Index*, 1992.
- *14. Pan Hla, Nai, *The Significant Role of Mon Language and Culture in Southeast Asia, Part I*, 1992.
15. 札奇斯欽, 我所知道的德王和當時的内蒙古(二), 1993.
16. 王輔世, 苗語古音構擬, 1994.
17. 王輔世, 宣化方言地圖, 1994.
- *18. Bira shagdaryn, *studies in The Mongolian History, Culture and Historiography*, 1994.

Studia Culturae Islamicae

1. NAKANO, A., *Basic Vocabulary in Standard Somali (I)*, 1976.
2. MIKI, W., *Index of the Arab Herbalist's Materials*, 1976.
3. YAJIMA, H., *The Arab Dhow Trade in the Indian Ocean*, 1976.
4. NAGATA, Y., *Some Documents on the Big Farms (Çiftlik) of the Notables in Western Anatolia*, 1976.
5. MIYAJI, K., "Kaçem Ali"—*Monographie d'un domaine autogéré de la plaine de Mitidja (Algérie)*, 1976.
6. MIYAJI, M., *L'émigration et le changement socio-culturel d'un village Kabyle (Algérie)*, 1976.
7. MIKI, W. & 'Abd al-Raḥīm, *Village in Ottoman Egypt and Tokugawa, Japan; A Comparative Study*, 1977.
8. M. Salah Ahmed, HONDA, G. & MIKI, W., *Herb Drugs and Herbalists in the Middle East*, 1979.
9. 上岡弘二, 家島彦一, インド洋西海域における地域間交流の構造と機能—ダウ調査報告 2, 1979.
- *10. KAMIOKA, K., & YAMADA, M., *Lāri Basic Vocabulary; Lārestānī Studies 1*, 1979.
11. NAGATA, Y., *Materials on the Bosnian Notables*, 1979.
12. SHIMIZU, K., *Bibliography on Saljuq Studies*, 1979.
13. HANEDA, K., *Tabrizi Vocabulary; an Azeri-Turkish Dialect in Iran*, 1979.
14. NAKANO, A., *Report on Moroccan Urban and Rural Life 1; Ethnographic Texts in Moroccan Arabic*, 1979.
15. TSUGE, Y., *Ethnographic Texts in Amharic (1)*, 1982.
16. YAJIMA, H., *Hasan Tāj al-Dīn's The Islamic History of the Maldive Islands (D. 1139 A. H./1727 A. D.)*, Vol.1(Arabic Text), 1982.
17. NAKANO, A., *Somali Folktales (1); Texts in Somali [1]*, 1982.
18. NAKANO, A., *Folktales of Lower Egypt (1); Texts in Egyptian Arabic [1]*, 1982.
19. BELLAKHADARI, J., HONDA, G. & MIKI, W., *Herb Drugs and Herbalists in the Maghrib*, 1982.
20. YAMAGATA, T., *Coptic Monasteries at Wadi al Natrun in Egypt—From the Field Notes on the Coptic Monks' Life—*, 1983.
21. BAYKARA, T., *Yatağan —Her Şeyi İle 'Tarihi Yaşatma Denemesi'—*, 1984.
22. YAJIMA, H., *Hasan Tāj al-Dīn's The Islamic History of the Maldive Islands, Vol. 2 (Annotations and Indices)*, 1984.
23. NAGHIZADEH, M., *The Role of Farmer's Self-Determination, Collective Action and Cooperatives in Agricultural Development; A Case Study of Iran*, 1984.
24. ABDULSALAM, A., *The Rural Geographic Environment of the Syrian Coastal Region and the Shizuoka Region; A Comparative Study of Syria and Japan*, 1985.
25. ABDULSALAM, A., *Adighean (Western Circassian) Vocabulary*, 1985.
26. TSUGE, Y., *Ethnographical Texts in Amharic (2)*, 1985.
27. BAŞER, K., HONDA, G. & MIKI, W.; *Herb Drugs and Herbalists in Turkey*, 1986.
28. USMANGHANI, K., HONDA, G. & MIKI, W., *Herb Drugs and Herbalists in Pakistan*, 1986.
29. NAKANO, A., *Comparative Vocabulary of Southern Arabic (Mahri, Gibbali and Soqotri)*, 1986.
- *30. KAMIOKA, K., RAHBAR, A. & HAMIDI, A. A.; *Comparative Basic Vocabulary of Khonjī and Lārī; Lārestānī Studies 2*, 1986.
31. 家島彦一, *Arwād 島——シリア海岸の海上文化——*, 1986.
32. TAKESHITA, M., *Ibn 'Arabī's Theory of the Perfect Man and Its Place in the History of Islamic Thought*, 1987.
33. HAYASI, T., *A Turkish Dialect in North-Western Anatolia; Bolu Dialect Materials*, 1988.
34. PARSINEJAD, I., *Mirza Fath Ali Akhundzadeh and Literary Criticism*, 1988.
35. SATO, T., *The Syrian Coastal Town of Jabala—Its History and Present Situation*, 1988.
- *36. 家島彦一, 上岡弘二, イラン・ザグロス山脈越えのキャラバン・ルート, *IRANIAN STUDIES 1*, 1988.
- *37. 上岡弘二, 羽田亨一, 家島彦一, ギーラーンの定期市—1986年度予備調査報告—, *IRANIAN STUDIES 2*, 1988.
38. HAKAMI, N., *Pèlerinage de l'Emām Rezā; Étude Socio-économiques*, 1989.
- *39. HONDA, G., MIKI, W. & SAITO, M., *Herb Drugs and Herbalists in Syria and North Yemen*, 1990.
40. OHTA, K., *The History of Aleppo; Known as ad-Durr al-Muntakhab by Ibn ash-Shihna*, 1990.
41. Raouf Abbas Hamed, *The Japanese and Egyptian Enlightenment; A Comparative Study of Fukuzawa Yukichi and Rifā'ah al-Taḥṭāwī*, 1990.
42. YAMAUCHI, M., *The Green Crescent under the Red Star; Enver Pasha in Soviet Russia 1919–1922*, 1991.

- *43. NISHIO, T., *A Basic Vocabulary of the Bedouin Arabic Dialect of the Jbāli Tribe (Southern Sinai)*; *Studia Sinaitica I*, 1992.
- *44. 日高英實, イラン現代政治年表 I : 1946年 3 月—1949年 3 月, *IRANIAN STUDIES* 3, 1992.
- *45. 日高英實, イラン現代政治年表 II : 1949年 3 月—1952年 3 月, *IRANIAN STUDIES* 4, 1993.
- *46. YAMAUCHI, K., *The Vocabulary of Sasanian Seals*, *IRANIAN STUDIES* 5, 1993.
- 47. 日高英實, イラン現代政治年表 III : 1952年 3 月—1952年 9 月, *IRANIAN STUDIES* 6, 1993.
- 48. NAKANO, A., *A Basic Vocabulary in Zanzibar Arabic* 1994.
- 49. NAKANO A., *Ethnographical Texts in Modern Western Aramaic (1) (Dialect of Jubb 'adin)*, 1994.
- 50. NAKANO, A., *Ethnographical Texts in Moroccan Berber (1) (Dialect of Anti-Atlas)*, 1994.
- 51. 日高英實, イラン現代政治年表 IV : 1952年 9 月—1953年 3 月, *IRANIAN STUDIES* 7, 1994.
- 52. DAIBER, H., *The Islamic Concept of Belief in the 4 th/10 th Century*, 1995.
- 53. 日高英實, イラン現代政治年表 V : 1953年 3 月—1953年 6 月, *IRANIAN STUDIES* 8, 1995.
- 54. NAKANO, A. *Ethnographical Texts in Moroccan Berber (2) (Dialect of Anti-Atlas)-Studia Berberi (II)*, 1995.

African Languages and Ethnography

- 1. EGUCHI, P. K., *Miscellany of Maroua Fulfulde (Northern Cameroun)*, 1974.
- *2. MATSUSHITA, S., *A Comparative Vocabulary of Gwandara Dialects*, 1975.
- 3. MOHAMMADOU, E., *L'Histoire des Peuls Férôlé du Diamaré; Maroua et Pétété*, 1976.
- 4. EGUCHI, P. K. (tr.), *Shi'r al-Ṭūba (Poem of Repentance)*, 1976.
- 5. WADA, S., *Hadithi za Mapokeo ya Wairaqw (Iraqw Folktales in Tanzania)*, 1976.
- 6. NAKANO, A., *Dialogues in Moroccan Shilha (Dialects of Anti-Atlas and Ait-Warain)*, 1976.
- 7. TANAKA, J., *A San Vocabulary of the Central Kalahari-G//ana and G/wi Dialects*, 1978.
- 8. MOHAMMADOU, E., *Les Royaumes Foulôé du Plateau de l'Adamaoua au XIX^e siècle*, 1978.
- 9. MATSUSHITA, S., *In a Small Town on the Benue-Fula Texts from Gongola State, Northern Nigeria*, 1978.
- 10. HINO, S., *The Classified Vocabulary of the Mbum Language in Mbang Mboum—with Ethnographical Descriptions*, 1978.
- 11. EGUCHI, P. K., *Fulfulde Tales of North Cameroon I*, 1978.
- 12. MOHAMMADOU, E., *Catalogue des Archives Coloniales Allemandes du Cameroun*, 1978.
- 13. EGUCHI, P. K., *Fulfulde Tales of North Cameroon II*, 1980.
- 14. MOHAMMADOU, E., *Le Royaume du Wandala ou Mandara au XIX^e siècle*, 1982.
- 15. EGUCHI, P. K., *Fulfulde Tales of North Cameroon III*, 1982.
- 16. NAKANO, A., *A Vocabulary of Beni Amer Dialect of Tigré*, 1982.
- 17. MOHAMMADOU, E., *Peuples et Royaumes du Foubina*, 1983.
- 18. EGUCHI, P. K., *Fulfulde Tales of North Cameroon IV*, 1984.
- 19. KAJI, S., *Deux Mille Phrases de Swahili Tel Qu'il Se Parle au Zaïre*, 1985.
- 20. MOHAMMADOU, E., *Traditions d'Origine des Peuples du Centre et de L'ouest du Cameroun*, 1986.
- 21. EGUCHI, P. K., *An English-Fulfulde Dictionary*, 1986.
- 22. MOHAMMADOU, E., *Les Lamidats du Diamaré et du Mayo-Louti au XIX^e siècle*, 1988.
- 23. MOHAMMADOU, E., *Traditions Historiques des Peuples du Cameroun Central Vol.1*, 1990.
- 24. MOHAMMADOU, E., *Traditions Historiques des Peuples du Cameroun Central Vol.2*, 1991.
- 25. KIMURA, E., *Mabadiliko ya Kijamii Na Riwaya ya Upelelezi Tanzania (Social Changes and Detective Novels of Tanzania)*, 1992.
- 26. KAJI, S., *Vocabulaire Lingala Classifié*, 1992.

Sudan Sahel Studies

- 1. TOMIKAWA, M. (ed.), 1984.
- 2. TOMIKAWA, M. (ed.), 1986.

African Urban Studies

- 1. HINO, S. (ed.), 1990.
- 2. HINO, S. (ed.), 1992.
- 3. HINO, S. (ed.), 1993.

Bantu Vocabulary Series

1. YUKAWA, Y., *A Classified Vocabulary of the Mwenyi Language*, 1987.
2. YUKAWA, Y., *A Classified Vocabulary of the Nkoya Language*, 1987.
3. KAGAYA, R., *A Classified Vocabulary of the Lungu Language*, 1987.
4. KAGAYA, R., *A Classified Vocabulary of the Lenje Language*, 1987.
5. YUKAWA, Y., *A Classified Vocabulary of the Nilamba Language*, 1989.
- *6. KAGAYA, R., *A Classified Vocabulary of the Pare Language*, 1989.
7. YUKAWA, Y., *A Classified Vocabulary of the Luba Language*, 1992.
8. KAGAYA, R., *A Classified Vocabulary of the Bakueri Language*, 1992.
9. NAKAGAWA, H., *A Classified Vocabulary of the Ha Language*, 1992.
10. BESHIA, R. M., *A Classified Vocabulary of the Shambala Language with Outline Grammar*, 1993

Bantu Linguistics (ILCAA)

1. *Studies in Zambian Languages*, 1987.
2. *Studies in Tanzanian Languages*, 1989.
3. *Studies in Cameroonian and Zairean Languages*, 1992.

Boucle du Niger

1. KAWADA, J.(ed.), 1988.
2. KAWADA, J.(ed.), 1990.
3. KAWADA, J.(ed.), 1992.
4. KAWADA, J.(ed.), 1994.

ILCAA African Literature Series

1. WUFELA, YAEK'OLINGO, André: *Littérature et Politique en Afrique Noire; Regards diachroniques sur le concept de l'engagement politique de l'écrivain dans la littérature africaine de langue française*, 1992.
2. WUFELA, YAEK'OLINGO, André: *Littérature Africaine et Christianisation de l'Afrique Noire; La conversion au christianisme - obstacles et motivations - dans la littérature africaine de langue française et anglaise*, 1992.
3. WUFELA, YAEK'OLINGO, André: *A la Recherche d'une Identité; Littératures, langues et recherche scientifique face au processus du développement au Zaïre*, 1992.
4. WUFELA, YAEK'OLINGO, André & SHEMBO SHEKA, Francine: *Cent Ans de Recherche sur le Peuple Môngc; Regards rétrospectifs et prospectifs suivis d'une bibliographie chronologique et sélective*, 1992.

African Language Study Series

1. DANIEL J. MKUDE, *Towards a Semantic Typology of Swahili Language*, 1995.
2. J. B. MAGHWAY, *Annotated Iraqwi Lexicon*, 1995.
3. J. B. MAGHWAY, *Some Salient Linguistic Features of an Iraqwi Narrative Text*, 1995.

Monumenta Serindica

1. IJIMA, S., (ed), *Changing Aspects of Modern Nepal; Relating to the Ecology, Agriculture and Her People*, 1977.
2. HASHIMOTO, M. J., (compl.) *The Newari Language; A Classified Lexicon of Its Bhadgaon Dialect*, 1977.
3. KITAMURA, H. (ed), *Glo Skad; A Material of a Tibetan Dialect in the Nepal Himalayas*, 1977.
4. MATISOFF, J. A., *Mpi and Lolo-Burmese Microlinguistics*, 1978.
5. HOSHI, M. & Tondup Tsering, *Zangskar Vocabulary; A Tibetan Dialect Spoken in Kashmir*, 1978.
6. KITAMURA, H., NISHIDA, T. & NISHI, Y. (eds.), *Tibeto-Burman Studies 1*, 1979.
7. NAGANO, Y., *Amdo Sherpa Dialect; A Material for Tibetan Dialectology*, 1980.
8. NISHIDA, T., *The Structure of the Hsi-hsia (Tangut) Characters*, 1980.
9. THURGOOD, G., *Notes on the Origins of Burmese Creaky Tone*, 1981.
10. BISTA, D. B., IJIMA, S., ISHII, H., NAGANO, Y. & NISHI, Y., *Anthropological and Linguistic Studies of the Gandaki Area in Nepal*, 1982.
11. KARAN, P. P., PAUER, G. & IJIMA, S., *Map; The Kingdom of Nepal*, 1983.

12. TACHIKAWA, M., MIKAME, K., HOSHI, M. & NAGANO, Y., *Anthropological and Linguistic Studies of the Gandaki Area in Nepal II*, 1984.
13. KARAN, P. P., PAUER, G. & IJIMA, S., *Sikkim Himalaya—Development in Mountain Environment*, 1984.
14. MALLA, K. P., *The Newari Language: A Working Outline*, 1985.
15. ISHII, H., TACHIKAWA, M., NAKAZAWA, S., NAGANO, Y. & HOSHI, M., *Anthropological and Linguistic Studies of the Kathmandu Valley and the Gandaki Area in Nepal*, 1986.
- 15a. SHARMA, P. R., 三瓶清朝, 山本勇次, ネパールにおける言語・文化・社会の動態, 1986.
16. SUN, J. T. S., *Aspects of the Phonology of Amdo Tibetan: Ndzorge Śāme Xyra Dialect*, 1986.
17. KARAN, P. P., PAUER, G. & IJIMA, S., *Bhutan: Development amid Environmental and Cultural Preservation*, 1987.
18. EINOO, S., *Die Cāturmāsya odea die altindischen Tertialopfer dargestellt nach den Vorschriften der Brāhmaṇas und der Śrautasūtras*, 1988.
19. SUWA, T., *Two Essays on the Formation of the East Asian Ethnic World*, 1989.
20. FINCHER, J. H., *Chinese Democracy; Statist Reform, The Self-Government Movement And Republican Revolution*, 1989.
21. SEKINE, Y., *Theories of Pollution; Theoretical Perspective and Practice in a South Indian Tamil Village*, 1989.
22. SHIMA, I., *A Newar Buddhist Temple Mantrasiddhi Mahāvihāra and a Photographic Presentation of Gurumandalapūjā*, 1991.
23. 石井 博(編), ネパール言語彙集, 1993.
24. GENETTI, Carol, *A Descriptive and Historical Account of The Dolakha Newari Dialect*, 1994.
25. KARAN, P. P. & ISHII H., *Nepal Development and Change in a Landlocked Himalayan Kingdom*, 1994.
26. 石井博(編), 南アジア, 東南アジアにおける宗教, 儀礼, 社会—「正統」, ダルマの波及・形成と変容—, 1995.

Studies in Socio-Cultural Change in Rural Villages in Tiruchirapalli District, Tamilnadu, India

1. KARASHIMA, N., SUBBARAYALU, Y. & SHANMUGAM, P., *Land Control and Social Change in the Lower Kaveri Valley from the 12th to 17th Centuries*, 1980.
2. HARA, T. & KOMOGUCHI, Y., *Socio-Economic Studies of Two Villages; Esnakorai and Peruvalanallur, Lalgudi Taluk*, 1981.
3. 柳沢 悠, 南インド・カーヴェリ河流域の農村社会の史的变化—アパドゥライ村の土地所有関係を中心にして—, 1981.
4. SUBBIAH, S.; MIZUSHIMA, T. & NARA, T., *Socio Economic Studies of Two Villages; Mahizambadi and Neykulam, Lalgudi Taluk*, 1981.
5. NAKAMURA, H., *Disintegration and Re-integration of a Rural Society in the Process of Economic Development; The Second Survey of a Tank-based Village in Tamil Nadu*, 1982.

Socio-Cultural Change in Villages in Tiruchirapalli District, Tamilnadu, India

1. KARASHIMA Noboru (ed.): Part 1; Pre-modern Period, 1983.
2. HARA Tadahiko, MIZUSHIMA Tsukasa & NAKAMURA Hisashi: Part 2; Modern Period 1, 1983.
3. YANAGISAWA Haruka: Part 2; Modern Period 2, 1983.
4. KOMOGUCHI Yoshimi: Part 2; Modern Period 3, 1984.

Studies in Socio-cultural Change in Rural Villages in Bangladesh

- | | |
|-------------------------------------|----------------------------------|
| *1. UMITSU, M., & HARA, T. 1985. | *6. TANIGUCHI, S., 1987. |
| 2. FAROUK, A., 1985. | 7. SATOH, T. & UMITSU, M., 1987. |
| *3. TANIGUCHI, S. & SATO, H., 1985. | 8. FAROUK, A., 1987. |
| *4. ISLAM, S., 1985. | 9. MOHSIN, K. M., 1990. |
| 5. CHOWDHURY, A., 1987. | |

South Asian Monograph

1. KAWAI, A., *'Landlords' and Imperial Rule: Change in Bengal Agrarian Society c 1885–1940*, Vol.1,

1986, Vol.2, 1987.

2. 水島 司, 南インド在地社会の研究, 1987.

AA-Ken Caribbean Study Series

1. YAMAGUCHI, M. & NAITO, M. (eds.), *Comparative Studies on the Plural Societies in the Caribbean*, Vol.1, 1985.
2. VERNON, D., *Money Magic in a Modernizing Maroon Society*, 1985.
3. YAMAGUCHI, M. & NAITO, M. (eds.), *Social and Festive Space in the Caribbean: Comparative Studies on the Plural Societies in the Caribbean*, Vol.2, 1987.

Bargery Toolbox 1 (1983)

1. Bargery Toolbox, 1 (MATSUSITA, S., *Based Rev.G. P. Bargery's A Hausa-English Dictionary*, 1993).
2. Bargery Toolbox, 2 (MATSUSITA, S., *Based Rev.G. P. Bargery's A Hausa-English Dictionary*, 1994).
3. Bargery Toolbox, 3 (MATSUSITA, S., *Based Rev.G. P. Bargery's A Hausa-English Dictionary*, 1995).

一般研究出版物

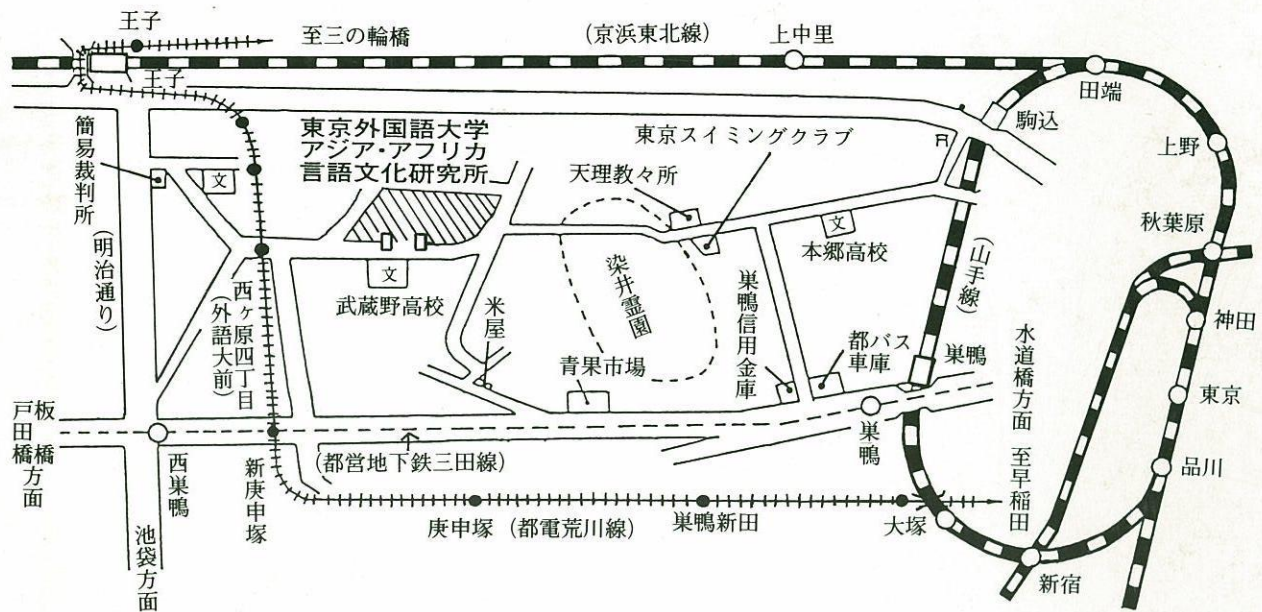
1. 湯川恭敏, サンバー語動詞のアクセント, 1983.

コンピュータ マニュアル シリーズ

1. VSAMEDIT (テキストエディター) 松下周二 (1984).
 - *2. FONTMAKER (文字フォント作製・修正) 今井健二 (1985).
 3. BUNPOO (文法: 文字コード変換) 今井健二 (1982).
 4. AAFE (文字フォントエディタ) 今井健二 (1985) [廃版]
 5. AATEDIT (各種言語テキストエディタ) 今井健二 (1985) [廃版]
 6. 辞書検索表示プログラム 松下周二 (1986).
 7. TEDIT (フルスクリーンテキストエディタ) 今井健二 (1990).
 8. 電子辞書 DICSEARCH 松下周二 (1992).
- 別冊 文字フォントリスト1 (1993), 2 (1988), 3 (1992), 4 (1991), 5 (1993).

アジア・アフリカ言語データシリーズ

1. 坂本恭章編, 近世アンコール碑文—KWIC 索引, 1986.
2. MALLIK, B. P., NARA, T., SAKAMOTO, Y., *South-Asian Series—Bengali Language (1)*, 1987.
3. MALLIK, B. P., NARA, T., SAKAMOTO, Y., *South-Asian Series—Bengali Language (2)*, 1988.
4. SAKAMOTO, Y., *Austro-Asiatic Series—Khmer (2)* CBAP SREI, 1989.
- *5. MALLIK, B. P., NARA, T., SAKAMOTO, Y., *South-Asian Series—Bengali Language (3)*, 1991.
6. MALLIK, B. P., NARA, T., SAKAMOTO, Y., *South-Asian Series—Bengali Language (4)*, 1994.
7. MALLIK, B. P., NARA, T., SAKAMOTO, Y., *South-Asian Series—Bengali Language (5)*, 1994.
8. SEN, S.: *Syntactic Studies Of Indo-Aryan Languages*, 1995.
9. MALLIK, B. P., NARA, T., SAKAMOTO, Y., *South-Asian Series—Bengali Language (6)*, 1995.



(交通機関)

1. JR山手線大塚駅で下車し、都電(荒川線)三の輪橋方面に乗って四つ目の西ヶ原4丁目(外語大前)から徒歩3分。又はJR京浜東北線王子駅で下車し、都電(荒川線)早稲田方面に乗って三つ目の西ヶ原4丁目(外語大前)から徒歩3分。
2. 都営地下鉄三田線西巢鴨駅下車、徒歩10分。
3. JR山手線巢鴨駅又は駒込駅下車、徒歩15分。
4. JR京浜東北線王子駅南口下車、徒歩20分。

**アジア・アフリカ言語文化研究所
東京外国語大学**

〒114東京都北区西ヶ原4丁目51番21号

TEL 03-3910-9147 (代)

FAX 03-5974-3838